

## Bruno Lessing の中国語訳

渡辺浩司

1

Bruno Lessing は、本名 Rudolph Edgar Block、アメリカの作家で、記者や編集者としても活動していた。ニューヨーク出身、1870年生、1940年没で、ニューヨーク・イーストサイドの Ghetto を舞台とする短篇小説を数多く著した。

彼の作品が、1910年代という同時代に、中国で翻訳されていたので、本稿で報告する。見つかったのは五作で、中国語訳の発表順に表にまとめる。

原作	巻号(発行年月)	中国語訳	掲載誌(発行年月日)
Bête Noir	54-6(1913.5)	薔薇花	中華教育界3-2 (1914.2.15)
The Troubles of Lazarus Abrahamovitch	51-1(1911.6)	留聲機	中華教育界3-7 (1914.7.15)
Tempus Fugit	46-4(1909.3)	情歎苦歎	禮拜六25(1914.11.21)
The Party Line	48-1(1909.12)	屬垣有耳	禮拜六43(1915.3.27)
The Meanest Man That Ever Lived	44-6(1908.5)	饕餮名家	小説大觀14(1919.9.1)

原作の掲載誌はすべて『Cosmopolitan (Magazine)』である。

以下、表の順で、Lessing の Ghetto にどっぷりつかった作品をどのように翻訳しているのか一作ずつ見ていく。

2 《薔薇花(教育小説)》

くり返すが、原作は、『Bête Noir』で、『Cosmopolitan(Magazine)』Vol.54-No.6 (International Magazine Company, 1913年5月 - 出版社は以下同)に掲載された。

中国語訳は、『中華教育界』3巻2期(14号,中華書局,1914年2月15日)に掲載(未見、『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄編,2011年3月31日)に拠る)され、後に『小説名畫大觀』(胡寄塵編,文明書局/中華書局,1916年10月 - 書目文献出版社影印(1996年7月)を使用)に収められた。中華教育界誌未見のため、本稿では、『小説名畫大觀』所収を使用した(次章3も同)。

書名下に“天笑/毅漢”とあり、書名次行に“美國伯倫那梨星原著\*1”とある。訳者の“天笑”は、包公毅で、原籍は江蘇吳県、1876年生、1973年没、“天笑”はその号だが、本名よりも包天笑で知られている。晩清から作家として、創作及び翻訳作品を大量に発表し、また、雑誌編集者としても活躍した。“毅漢”は、張毅漢で、原籍は広東新会、1895年生、1950年没、13歳から小説を発表し始め、共作も含めて約130の作品を残した。その大部分は翻訳小説という。

原作『Bête Noir』のあらすじを述べる。

私の友人 Orson の法律事務所に速記者 Spencer 女士がいた。彼女は30～55歳、やせて無口で几帳面で、いつも黒い服装で、言葉や態度から感情を表すことは無かった。

ある日、私が Orson に、女士は黒以外の服を決して着ない、中年になるまでに彼女に恋愛物語はあったのだろうか等と言った所、彼は、年に一度、首にカラフルなりボンを巻いて来ることがあり、彼女宛にバラの花束が届くので、その日は彼女の何かの記念日で、送り主は昔の恋人ではないか等と答えた。

その記念日に、私は Orson の事務所を訪ねた。彼は外出中で、女士一人だった。赤いりボンを首に巻き、私がそれに気付いた時、彼女は少し赤面したようだった。そこにバラの花束が届いた。女士は無表情で受け取り、ぞんざいに机の上に置いた。Orson の部屋の電話が鳴ったので、女士が応対に部屋を出た。私は花束に付いていたカードを見た。それには「From a bad boy(悪ガキより)」と下手な字で書かれていた。女士が私を見ているのに気付き、今度は私が赤面し、言い訳をした。女士は黙っていたが、その目はなぜか輝いていた。女士は花束をくずかごに投げ捨て、私に向かい East Side の物語をよく執筆しているのでしょうか、と尋ねてきた。私が答に窮していると、女士は花束について聞いてほしいと言って語り始めた。



“Hiss name iss Abey Levy,” the father said, smiling. “He don’t want to go to school, but I said I bet he goes, unt I vin der bet. Please, Mrs. Teacher, make him study”

Spencer 女士は East Side の公立学校の 6 A 組の教師だった。ある生徒が現れるまでは仕事はとても順調だった。父親に連れられてやって来たその生徒は Abraham Levy、East Side では珍しい美少年だった。父親は、少年の頭をたたき、言うことを聞かなければ体罰を、と言ったが、女士はすぐに体罰を否定した。

少年は外で働きたいと言い、授業には全く関心が無く、早く退学にしてもらいたがっていた。授業中、女士が少年に、黒板の前で問題を解くよう言った所、少年は反抗して席を立たなかった。女士が怒って少年の襟をつかむと、少年は大声で泣き喚いた。そのため、校長たちが女士の教室にやって来た。女士が説明する間も無く、少年が体罰だと訴えたため、校長は女士に注意し、その場は収まった。その晩、女士は眠れず、どうしてあのような少年が自分の組に入ったのだろう等と考えていた。

翌日、女士は少年を無視し、少年もそれに満足し、女士を無視した。女士は、少

年が授業中にこっそりと仕事関係の本を読んでいるのを見つけ、驚いたが何も言わなかった。放課後、女士は少年の父に手紙を書き、少年に託した。翌朝、女士が少年に確認した所、少年は、渡せば父に殴られるから捨てたと答えた。女士が手紙を直接、少年の父に送った所、その翌朝、少年は女士に、やっぱり父に殴られたと話した。女士が当然だと言うと言うと、少年はうんざりして、父と同じことを言ってる等と話した。

その後、1か月近く、授業は平穩だった。その間、少年は喧嘩で組のリーダーになっていた。そして、少年の態度で組全体が徐々に崩壊していった。ある時、女士は校長に訴えたが、校長は、女士にはその類の生徒とやっていく能力があり、信頼を得て、間違いを彼自身に気付かせることがきっとできるだろう等と答えた。

女士は毎週、少年の父に手紙を送り、少年はその翌朝、罰を受けたことを女士に知らせた。女士がいくら諫めても、少年の態度は変わらず、仕事に出たい、退学にしてほしいと言いつづけた。

ある日、女士は授業で独立宣言について教えていた。少年はゴム製の紙飛ばしを作り、教室中に紙つぶてを飛ばし、その度に「痛ッ」という声が起こった。女士は完全にやる気を失い、壁に向かって独立宣言の話をし、生徒が聞いているかどうかはお構いなしだった。

翌日、女士はバラを留めた服で現れ、とても楽しそうに見えた。生徒に「今日は私の誕生日です。もし皆がいい生徒になって授業を聞いてくれたら、それが私への誕生日プレゼントです。」等と言った。少年は立ち上がり、顔を輝かせて「僕も誕生日だ、今日は行儀よくするよ」等と言い、更に他の生徒に向かって「しない奴はぶん殴るぞ!」と言った。女士はここ数週間で初めて、教室を見渡した時に満足を感じた。女士は微笑んで、昨日教えた独立宣言について誰か覚えていますか等と尋ねた所、少年が、先生が教えたことは全部わかってます等と言い、驚く先生の前で「George 国王が我々に過酷な税を課し…」と始めた。昨日の話をすべて終えると、少年は更に、7月4日は独立宣言のみで合衆国憲法には触れていなかった等と付け加えた。女士はショックのあまり、しばらく座り込み黙ったままだった。女士は少年に、他の事柄についても理解しているのか確認した所、少年は正確に覚えており、他の生徒もびっくりしていた。休み時間に女士は少年を呼び、やさしく肩に手を置いて、子供同士が使う「Abey」という愛称で、初めて少年に呼びかけ、どうしていつもは違うのか等と尋ねた。少年は、誕生日だから等と答えた。その後、女士の

ために生徒全員が果物を持って来た、少年が一番手だった。

翌日、地区の視察官が学校を訪れ、女士の組に現れた。視察官が「アメリカを発見したのは誰ですか」と尋ねると、少年は手を挙げ「George Washington が Delaware を渡って来たんです！」と大声で答えた。他の生徒は笑い出し、視察官は眉をひそめ、女士は赤面した。視察官がメモをとったので、後日譴責を受けるだろうと女士は落胆した。授業後、少年に尋ねると、少年は、退学になりたい、もし先生が退学にしてくれたら、父は自分を働きに出すだろう、自分はすでに2校で退学になっている等と答えた。

その後、組は以前のもままで、絶え間なくいたずらしたり、バカになったふりをしたり、組全員が反抗するように仕向けたり、と少年のために、女士は精神異常寸前にまでなった。女士は少年の父に手紙を書き続けたが、父親は罰を与える以外には何もできなかった。女士はやせていき、しわは深くなり、怒りで何度も涙を流したが、少年を憎めなかった。

数日後、6 B 組への進級試験があった。6か月の学習成果を見るもので、75パーセント以上正解でなければ、女士の組6 Aをもう1学期受けなくてはならない。女士は採点を始めた。1枚目は少年の答案で、1問目の答が「 $3 \times 27 = 28$ 」だった。ざっと見た所、すべて似たような答だった。女士は、もう1学期、この少年を受け持つのか等と考え、点数の水増しは大罪で、見つければクビになることもわかっていて。しかし、長く感じる1分間、考えた挙句、自衛本能が勝り、答案に「75%、合格」と書いた。

翌日、校長に答案を提出し、併せてすぐに休暇をとった。女士は、罪の意識に耐え、罪が明かされるかも知れないという大きな危険を敢えて冒そうと思ったが、罪が公になった時に世間の目にさらされるのは無理だと思っていた。ただ、何も起きなかった、校長は答案のチェックという面倒な事はせず、少年も何も言わなかった。

2か月の休暇をとって、女士は通常の状態に回復した。罪を思い出して、自責の念にかられることもあったが、少年の能力は上級の組でもやっていけると理解していたので、システム上で不正なことは何も無いと自らを慰めた。

学校に戻った所、校長が、いい知らせがあると言って、6 B 組の担任を女士にする等と話した。6 B の担任は以前からの目標だったので、一瞬喜んだが、少年を思い出し、落胆した。女士が、少し考えてもいいですかと小声で尋ねると、校長は驚いて、割り当てられた組を受け持つのは義務だと冷たく言った。女士はぼそぼそと

謝り、新しい組へと急いだ。教室の最前列に少年が座っており、女士に向かい、顔色がいいけど、田舎にでも行ったのですか等と声をかけてきた。すぐに女士が、この組では行儀よくするかと尋ねた所、少年は眉間にしわをよせ、仕事に出たいんだ等と答えた。女士は教室そして建物から出て行った。落ち着いてから、辞表を提出し、速記の勉強を始めたのであった。

後、かなり経ってから、路面電車の中で少年に会い、二人はすぐにお互いに気付いた。少年の態度はかなりよくなっていたが、言葉遣いはまだまだだった。彼は服屋に勤め、うまくやっているようで、いつか金持ちになるだろうと女士は語った。彼が、あの頃は相当な悪ガキだったでしょう等と尋ねたので、女士はその通り等と答えた。更に尋ねられたので、女士は今の仕事を話した。それ以来、誕生日に彼から花が贈られるようになった。彼も誕生日が同じだということを思い出しているのだろうと女士は語った。

私が話を聞かせてもらった礼を言うと、女士は笑って「その花には恋愛話など何も無いんです」等と言った。

私は、その後ずっと、女子の話、特に少年への体罰の欲求について考えていた。しかし、帰り道で、女士が混雑の中、あの花束を押しつぶされないようにしっかりと胸に抱えていたのを見て、私は考えがすっかり変わったのであった。

転職後の速記者という職業を除けば、現在でもそのままありそうな物語である。ゴミ箱に捨てたはずの花束を大事に抱えて帰宅する女士を、たまたま見かけたとする所が心憎い終わり方だと思う。書名の *Bête Noir* はフランス語で、通常は *Bête Noire* と書かれ、「嫌いな奴」を意味する。当時、流行した映画が何かから借りたのだろう。

中国語訳について述べる。他に訳されていた場合の、原作探求の手掛かりになると思うので、主な固有名詞の対照表を示す。

原作	中国語訳	原作	中国語訳
Abraham Levy	亞伯刺哈摩 耐威	Spencer	斯賓塞
Abey	亞庇	Orson	敖生

書名について、原作で「*Bête Noir*」(嫌いな奴)とするのを、中国語訳では、原題のフランス語の持つ雰囲気までは出せないで、“薔薇花”(バラの花)に変えてい

る。妥当な改訳だと思う。

内容は、物語自体は変えていないが、改訳(或は誤訳)・加筆・省略がしばしば見られる。まず冒頭の改訳を挙げる。

It is only in fiction that you find pure comedy or pure pathos; in the situations which the cross-currents of life provide, there is always a touch of the pathetic in the comedy and, in most cases, an element of humor in the tragedy. (849頁左)

(生粋の喜劇、或は、生粋の悲哀が見られるのは虚構の中だけである；人生の逆流がもたらす状況では、喜劇の中にいつも軽い悲哀が含まれるし、大抵の場合、悲劇の中にもユーモアの要素が含まれるからである。)

伯倫那梨星曰。我每著筆。所道恒多實事。時人每讀小説及視戲劇。如身入其中。遇悲慘處。則為之嗚咽不怡。而出以滑稽。則又捧腹大噱。將謂文家過事描摹。以虛幻之文章。引人入勝。實則烏有此事者。我且弗道事之真幻。僅舉一小小之故事。至平庸而無奇者。人將弗嗤我為妄乎。(1葉右,句点は原文のまま,以下同)  
(伯倫那梨星は言う。私が書くものは、大部分が実際のことである。人々は小説を読んだり、劇を見たりすると、作品の中に入り込み、悲しい場面では落胆して涙を流し、可笑しい場面になると、腹を抱えて笑い出すのである。作家は大げさに描き、虚構の文章で人を引きつけられている。実はそんなことは全く無い。ひとまず本当のことかどうかは言わずに、ごく短い物語をお目にかけてよう、とても平凡で珍しくもない内容である。私がでたらめを言っていると嘲笑する人はいないだろう。)

これはもう翻訳ではなく、訳者の創作である。次に、誤りを1例挙げる。少年が授業中に隠れて読んでいる本の題名である。

It was entitled, "How to Be a Salesman." (852頁左)

(それは「セールスマンになる方法」という書名が付いていた。)

葉首題曰。(航海入門)。(4葉右)

(書名は「航海入門」だった。)

Sales を sailor と誤ったのであろうか。少年は初めから、学校を辞めて給仕になり、お金を稼ぎたいと言っており、それを踏まえた「How to Be a Salesman」なのである。前提と無関係な“航海入門”では面白味が無くなると思う。

改訳のため、前後の記述が矛盾してしまった所を指摘しておく。少年の呼び方についてである。少年の初登校の日の放課後、女士が少年を残して注意する場面では、原作で「my boy」(850頁右)と呼ぶのに対し、中国語訳は“亞庇”(Abey)とする(2葉左)。また、原作で「Abraham」(850頁右)と呼ぶ所は、“亞庇耐威”(Abey Levy)と訳している(3葉右)。その後、二人の誕生日に、少年がアメリカ独立宣言のおさらいを見事に終えた後の休み時間に、女士が少年を残した場面で、原作が、

“ Oh, Abey ! ” it was the first time she had ever used the name by which the other pupils called him “ why aren't you always like this ? ” (853頁左-右)  
(「おお、Abey！」 他の生徒たちが使う呼び名で、彼女が少年を呼んだのはこれが初めてだった 「どうしていつもはさっきのようにはしてくれないの?」)

とするのを、中国語訳もそのまま、

“ 亞庇。汝何不常如今日也。 ” 噫。此為密司斯賓塞第一次呼之為亞庇。而致親愛之詞也。(5葉右,引用符は補った,以下同)  
(「亞庇、どうしていつもは今日のようにしてくれないの?」ああ、これは斯賓塞女士が亞庇と初めて呼んだのであり、愛情がこもった言葉である。)

としている。女士が少年に心を許した大切な場面なので、中国語訳は残念な矛盾である。

改訳をもう1例挙げておく。最後の場面である。

She was carrying the roses, holding them tight against her bosom with one hand while, with the other, she shielded them from the press of the throng about her. (855頁右)  
(彼女は片手でバラを持ち、胸の所でしっかり抱いていた、そしてもう片方の



手で、周りの人ごみからバラを守っていた。)

一手方力握亞伯刺哈摩所贈之花。緊貼胸次。復以一手護之。恐人羣之觸及此花。為狀至寶貴也。夫密司斯賓塞。既愛此花。則必甚愛此贈花之人。亞伯刺哈摩果已悔其前日之非。則仍可兒也。我援筆記之。以告當世之為小學教師者。并一切頑劣之學生。當知時不再來。悔已無及。而教師亦甚不易為也。(6葉左)

((女士は)片手で亞伯刺哈摩が贈った花を持ち、胸の前でしっかり抱いていた。そしてもう片方の手で、花が人ごみに触れないよう守り、まるで貴重品のよう  
に扱っていた。ス賓塞女士がこの花束を愛しく思うのは、贈ってくれた人のこと  
もとても愛しく思っているからに違いない。亞伯刺哈摩が昔の誤りを後悔し  
ていたのは、善人だったからである。私は本作によって小学校教師とすべての  
頑固で無知な学生に伝えたい、「時間は二度と戻らない、後悔しても遅いので  
ある」、そして教師も決して楽な仕事ではないのである。)

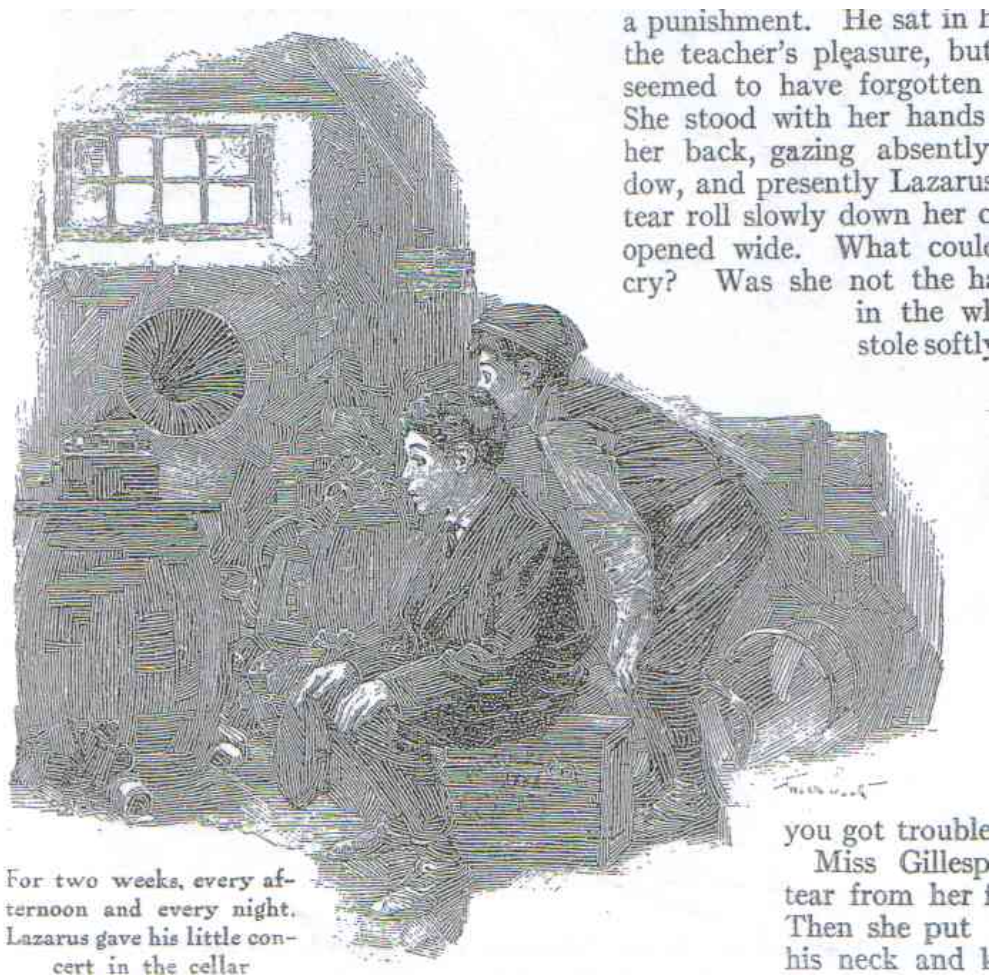
最後にも訳者の創作が入り込んでいる。原作者の名を借りて、訳者自身の主張を語るのは、他人名義の無断使用なので、“教育小説”にはふさわしくなく、不必要な改訳だと思う。

### 3 《留聲機(教育小説)》

原作は、『The Troubles of Lazarus Abrahamovitch』で、Cosmopolitan 誌 Vol.51-No.1(1911年6月)に掲載された。

中国語訳は、《中華教育界》3巻7期(19号,中華書局,1914年7月15日)に掲載(未見,前掲『清末民初小説目録 第4版』に拠る)され、《薔薇花》と同様、後に《小説名畫大觀》(胡寄塵編,文明書局/中華書局,1916年10月 - 書目文献出版社影印(1996年7月)を使用)に収められた。前者未見のため、後者を使用した。《小説名畫大觀》では二作続いているが、なぜか後出の本作が先になり、《留聲機》 《薔薇花》の順になっている。

書名下に“天笑/毅漢”とあり、訳者は《薔薇花》と同じ、包公毅と張毅漢である。原作者については独立した表記は無いが、前書きに“天笑生曰。向者余與毅漢。曾譯伯倫那梨星先生之薔薇花一篇。至今猶有餘味。今譯此篇。可謂同工異曲。”(1葉右、天笑生曰。以前、私は毅漢と、伯倫那梨星氏の薔薇花一篇を訳し、今もなお余韻が残っている。この度、訳した本篇も同工異曲と言えよう。)とあり、原作者が伯倫那梨星



a punishment. He sat in the teacher's pleasure, but seemed to have forgotten. She stood with her hands on her back, gazing absently down, and presently Lazarus' tears roll slowly down her cheeks. What could she have opened wide. What could she have cry? Was she not the heroine in the world who stole softly

For two weeks, every afternoon and every night, Lazarus gave his little concert in the cellar

you got trouble Miss Gillespie tear from her eyes. Then she put his neck and

であることを明記している。

原作『The Troubles of Lazarus Abrahamovitch』のあらすじを述べる。

Abrahamovitch はロシア系ユダヤ人で、社会主義者で、衣類を作る工場で働いている。彼には8歳の息子がおり、名を Lazarus といいた。7歳になるまで Yiddish し話さず、昨年ようやく英語を習い始めた。Abrahamovitch 夫人は社会主義者ではなく、四六時中、不平を言っている女性である。

Lazarus は内気で、学校では、成績は下の方だった。だが、それは理解力の不足ではなく、質問したりわかっていないと自分が認めたりすることに消極的なためだった。教師の Gillespie 女士は辛抱強く彼に接し、親切だったが、そんなには気に留めていなかった。彼女は婚約中で、担任からはずれることを望んでいたのも、他

の生徒のこともそれほど気に留めていなかったのである。

ある日、Lazarus はクラスメイトの Sammy Rosinsky に、ただで入場できるから大きな縁日に行こうと誘われた。それは彼にとって、家や学校以外の世間へのデビューだった。母に小遣いをねだったが、全く相手にされなかった。そこで、夜、父に理由を話してねだった所、父はこれしか出せないと言って10セントくれた。彼は早速それを持って出かけた。縁日自体は、楽しくて派手な、音・光・動きの寄せ集めで、結局、ごちゃごちゃしていたという記憶しか生まなかった。女性から5セントと引き換えに抽選券をもらったこと、1時間後、その女性が興奮してやって来て、ある小屋に連れて行かれ、重くて大きな品物を渡されたことは覚えていた。蓄音機が当たったと言われたが、彼はその名前すら知らなかったので、女性は包みを開け、使い方を説明した。すると、「Casey Jones」の歌が流れた。

彼は大喜びで、飛ぶように帰宅した。両親に見せた所、母は最初に少し興味を示しただけで、父は2回その歌を聞いてから読書に戻った。彼は寝る時間になるまで、その1枚のレコードをくり返し聴き、しっかりと元の紙に包んでベッドの下に置き、眠った。翌朝も家を出る前に2回聴いた。放課後、彼は自宅へクラスメイトを招き、一緒にレコードを聴いた。1時間以上くり返しその歌を聴いていた所、母親が我慢できなくなり、皆を追い出してしまった。それ以後、午後は部屋でレコードを聴けなくなった。父は母より寛大だったので、夜、父の帰宅後にはレコードを聴けた。父も息子が喜んで聴いているのを見て、いらいらを感じつつも我慢してきたが、ある日、普段とは違う長い手紙を書いていた時、ついに、家の外でやってくれ等と大声で言ってしまった。彼は蓄音機を持って外に出て、家の前の階段の所で聴き続けた。寝る時間になると、彼は建物の地下室に入り、ゴミの下に注意深く蓄音機を隠した。次の2週間、彼は地下室で聴いた。大抵一人で、いつも真剣に聴いていた。ある日、Sammy Rosinsky がやって来て、どうして新しいレコードを買わないのか等と尋ねた。彼はお金が無いからと答えた。

Gillespie 先生は婚約者との間に深刻なトラブルが生じていた。生徒たちも、彼女が時々うわの空だったり、泣きはらしたかのように両目をよく真っ赤にしているのに気付いた。ある日、Lazarus が居残りで着席していた。先生は窓の外をぼんやり眺めていたが、涙の大きな粒が流れた、彼はそれを見て驚いた。なぜ泣くのだろう、先生は世界一幸せではなかったのか等と思い、そっと先生に近づき手をつかんで、先生も悩みがあるんですかと尋ねた。先生は涙を拭くと微笑んで、彼を軽く抱

きキスし、私たち皆悩みがある、もうお帰りなさい等と言った。

帰宅後、彼は地下室でレコードを聴いたが、なぜかいつもほど楽しくなかった。先生のようなきれいな人にどうして悩みがあるのか、どうしたら先生を幸せにできるだろう等と考えた。ふと彼は、以前ある生徒が先生に、その母が作ったパイを持って行った所、先生が、こんなプレゼントをもらってなんて幸せでしょう！と言ったのを思い出した。パイをあげればいいんだと彼は思った。おいしくて大きなパイを10セントで買える店を知っていたが、お金が無かった。母にねだった所、全く相手にされなかった。父の帰宅後、ねだってみたが、すまないが今回は無理だと言われてしまった。その夜、彼は懸命にずっとその方法を考え、寝る前に思いついた。翌日の午後、彼は蓄音機を持って質屋に行った。以前、母と一緒に行ったことがあり、その手続等は知っていた。彼は10セント欲しいと言って、蓄音機を渡した。質屋は品物を調べて、質札と10セントを渡した。彼は喜んで、一番大きなパイを買い、翌朝、先生に贈った。先生が尋ねると、彼は「僕がパン屋で買ったよ、これ以上、先生が悩んで泣くことは無いよね」等と答えた。先生は目に涙を浮かべ、彼に感謝し、悩みがすべて解消したように思った。

Lazarus は蓄音機が無いので、気分がすぐれなかった。その歌を口ずさむくらいしかできなかったが、母に止めてくれと叱られた。その日から、生活にぽっかりと穴が空いたようで、彼は不幸だった。一度、先生のために蓄音機を質入したのは慌てすぎたかも等と思ったが、その思いをすぐに捨てて、どんなことがあっても先生は泣いてはいけなかった。しかし、日が経つにつれ、彼の悲しみはひどくなり、夜、眠る前に涙を流すまでになった。ある日、彼は質屋に行き蓄音機を見たいと頼んだが、すぐに追い返された。

翌日の放課後、先生は Lazarus を呼び止め、かなりやせてぼんやりしており、具合が悪いのか等と尋ねた。すると彼は先生に、まだ悩んでいるのか等と尋ね、先生がいいえと答えた。彼の顔に明るさが戻り、先生が幸せならばパイの代金10セント返してほしい、そうすれば蓄音機を質受けできる、また先生が悩むようなことになったら、自分はまたパイを贈る等と言った。先生は驚き、膝に彼を乗せて、自分の顔を見られないようにしてから、事情をすべて話すよう言った。彼は、縁日の夜の事、パイを買うために蓄音機を質入したこと等を話した。先生はずっと涙を流し続けたが、彼には見えなかった。涙が乾くと、先生は、あのパイのお礼にできる限りのことをするので、帰宅するように言った。

その日の午後、背の高いハンサムな若者がアパートの前にやって来て、Lazarus を呼んだ。彼が現れると、若者は、あの「Casey Jones」を返してあげるから一緒に行こうと言った。彼は若者を質屋に連れて行ったが、店の前でふと疑わしくなり、若者に、先生は何の悩みも無いのかと尋ねた。若者は無いと言い、彼女は自分で世界一幸せだと話していたと伝えた。彼は納得して質屋に入った。彼は、若者が10セントに加えて利息の3セントを払うのを見て驚いた。蓄音機を受け出すと、若者は彼を家とは違う方向に連れて行こうとした。彼が戸惑うと、若者は、先生がそうするように言ったと説明した。二人はレコード店に入り、大きな包みを持って出て来た。アパートに戻り、入口で若者は彼に、この2ダースのレコードは先生からのプレゼントだと言った、更に先生からの伝言として、これで悩みは無くなったのだから、もっと大きくなりなさい、パイのことは本当にありがとう、もし自分に悩みができたら、またパイをちょうだい等と言っていたことを伝えた。彼が微笑んで「もちろんさ、明日、先生に話すから」と言うと、若者は「先生は辞めてしまったので、もう会えないだろう、もし先生が悩んだことを君に伝えられなければ、私が君に伝えよう」等と言った。Lazarus は若者を見送り、最後に「忘れないでね！」と叫んだ。

ハッピーエンドと言える、安心して読める短篇である。最後に登場する若者が、一体誰なのかは述べていない。「Casey Jones」は、実在したアメリカ・ケンタッキー州出身の鉄道員 John Luther Jones(1864年生-1900年没,Casey Jones は愛称)を取り上げた歌。勤務中、衝突事故で殉職し、その後、彼を称えたこの歌が作られ流行した。

中国語訳について述べる。主な固有名詞の対照表を示す。

原作	中国語訳	原作	中国語訳
Lazarus Abrahamovitch	拉薩留 阿伯拉哈摩	Gillespie	基士立
Hester Street	海士脱街	Ghetto	法陶
Casey Jones	蓋錫 鐘		

Abrahamovitchを、阿伯拉哈摩とする。《薔薇花》のAbrahamを、亞伯刺哈摩としていたので、「-vitch」は音訳していないことがわかる。また、一方は「阿」「拉」を使い、一方は「亞」「刺」を使い、どう使い分けているのかが不明である。

書名について、原作は「The Troubles of Lazarus Abrahamovitch」(Lazarus Abrahamovitchの悩み)とし、中国語訳は“留聲機”(蓄音機)と改める。原題が長すぎるので、前作《薔薇花》の字数に合わせ、準主役と言うべき機械を採り上げたのであろう。いい改訳だと思う。

内容については、物語は変えないが、細かい加筆・改訳・省略が全体に見られる。改訳(或は誤訳)を1例挙げる。Lazarus が友人に縁日へ誘われる場面である。

“ They's a big fair by the Sons of Benjamin where they got raffles. My uncle is by the door, and I'm going to sneak the fellows in. Ask your mother to give you a quarter and come along. ”

That was not only Lazarus's début in society, it was the first time he had ever heard of society. Hitherto he had known only work, home, school, and the sidewalks. When he asked his mother for the quarter she stared at him.

“ A quarter? Are you crazy? ” She said no more. Later in the evening he asked his father, who took him upon his lap.

“ A quarter? What for, sonny? ”

“ All the boys are going by a big fair to-night, and I want to go, too. Sammy Rosinsky gets us in free for nothing. ”

His father counted out ten cents. “ This is all I can give you, dear, ” said he. (30頁左)

(「Sons of Benjamin の大きな縁日で、そこでは宝くじもやってるんだ。僕のおじさんが入口の所にいるから、皆でこっそり入れるよ。母さんに25セントもらってから一緒に行こう。」)

それは Lazarus の、世の中へのデビューだっただけでなく、世の中について耳にした初めてのことであった。これまで彼は、手伝いと家と学校と歩道しか知らなかった。彼が25セントをねだった時、母は彼をじっと見た。

「25セント? 気でも狂ったの?」それ以上何も言わなかった。日が暮れてから、彼は父にねだった、父は膝の上に彼を乗せた。

「25セント? どうしてだい?」

「みんな大きな縁日に行くので、僕も行きたいんだ。Sammy Rosinsky が僕たちをただで入れてくれるんだ。」

父は10セントを数えて出した。「これがお前にあげられるすべてだよ。」  
父は言った。)

盧信士曰：“此會至繁盛。更有抽彩之法。吾叔為之守門。故凡屬吾友。當可設法令其入也。汝可告爾母。乞得半點鐘之假。其一遊此盛會乎。”拉薩留茫然莫知所謂。蓋何謂盛會。何謂抽彩之法。渠腦中本無是影。渠腦中所有者。不外學校家庭作工。與夫街衢間之跳躍而已。然而好奇之心。又不能自遏。則歸而告母。乞此半點鐘之假矣。

母聞言。則以兩目睽其子者久之。曰：“半點鐘乎。汝乃發癩。”語已。不復聲。拉薩留不敢更請。入夜。其父歸。請於父。父摟於懷曰：“半小時乎。吾兒。汝試言需此半小時何為者。”拉薩留曰：“盧信士語兒以今夕有大會。校中諸生皆往。兒亦欲一觀其盛也。且盧信士言。我輩往。可免收入門之費。”其父探囊數二十銅圓與之曰：“將去。此我之所以與汝者。但須早歸。勿樂而忘返也。”(1葉左,コロンは補った,以下同)

(盧信士は「この縁日はとてもにぎやかで、宝くじもあるんだ。僕のおじさんが入口の係なので、友達なら何とか中に入れるよ。母さんに言って、半時間もらって来なよ。縁日で一度遊ぼうじゃない。」拉薩留はぼうっとしてどう言えばいいかわからなかった。一体縁日とは何か、宝くじとは何か、彼の頭にはその影すら浮かばなかった。彼の頭にあるものといえば、学校、家、手伝い、そして通りを跳びまわるように歩くことだけだった。しかし、好奇心は抑えられず、帰宅すると母に半時間の暇乞いをした。

母は聞くと、両目でじっと息子を見、しばらくして「半時間? 気でも狂ったの?」言い終わると何も言わなかった。拉薩留はそれ以上ねだろうとしなかった。日が暮れて父が帰ると、父にねだった。父は彼を胸の前に抱いて「半時間かい? 半時間で何をしたいのか言ってごらん。」拉薩留は「盧信士が今晚、大きな縁日があるって教えてくれて、学校中の皆が行くんで、僕も縁日を見に行きたいんだ。盧信士は、僕らが行くとただで入れてくれるとも言ったんだ。」父は袋から20銅圓数えて出し「持って行きなさい。お前にはこれだけしかあげられないよ。ただ早く帰りなさい、夢中になりすぎて帰るのを忘れないようにな。」)

細かな加筆が多く見られる。そして原作「a quarter」を“半點鐘”、“半小時”と訳している。これは改訳ではなく、誤訳だと思う。

改訳を1例挙げる。先生が Lazarus から真相を聞く場面である。

The teacher looked at him in amazement. Then, with lips firmly pressed together, she took him upon her lap and placed his head upon her shoulder in such a manner that he could not see her face. “ Now tell me all about it, ” she said.

Lazarus recited his story in all its simple details, from the night of the fair to that fatal day when he took “ Casey Jones ” from his hiding-place in the cellar in order to pawn him. It was fortunate that he could not see Miss Gillespie's face, for had he beheld how the tears coursed down her cheeks at that pathetic narrative nothing in the world could have convinced him that she had not troubles of her own. When he had finished she held him firmly for a long time. (34頁左)

(先生は驚いて彼を見た。それから口を固く閉じて、彼を膝に乗せて、頭を自分の肩にもたせかけた、その姿勢だと彼から自分の顔が見えないのである。

「さあすべて話してちょうだい。」彼女は言った。

Lazarus は詳細に、縁日の夜から、質入するために地下の隠し場所から「Casey Jones」を取り出したあの重大な日までをすべて話した。Gillespie 女士の顔が見えなかったのは、彼にとって幸運だった。なぜなら、その哀愁に満ちた物語を聞いて、女士のほほにどれほど涙が流れたかを彼が見たならば、世界中の何をもってしても、女士に悩みが無いのを彼に納得させられないからである。彼が話し終えた時、女士はそのまま彼をしっかり抱いていた。)

密司基士立良不審其意之所在。則摟之懷中。捺其首。枕己肩上。拉薩留更不能睹其師之面。密司基士立問之曰：“穉子。今可以爾事告我矣。”拉薩留乃舉此留聲機器之歷史。詳述言之。語未半。而密司基士立之珠淚。直滴於拉薩留之額。拉薩留駭愕起視曰：“噫。師又哭耶。將又有不快於心乎。”密司基士立曰：“否。前日之哭。為憂而哭也。今日之哭。為喜而哭也。”於是摟之懷中良久。(4葉左-5葉右)

(基士立女士はどういう意味か全くわからず、彼を胸の前に抱いて、首を自分の肩にもたせかけた。拉薩留には女士の顔は見えなかった。基士立女士は尋ね



た「さあ君の出来事を話してちょうだい。」拉薩留はあの蓄音機の歴史を詳しく語った。話が半分も進まないうちに、基士立女士の涙が拉薩留の額にまっすぐ落ちた。拉薩留は驚いて立ち上がり、女士を見ると「あれ、先生がまた泣いてる、また嫌な事があったの？」基士立女士は「いいえ、前に泣いたのは悩みのせいだったけど、今日泣いているのはうれしいからよ。」そして彼をしばらく抱き続けていた。）

原作で、少年が二度と女士の涙を見ないようにしているのに、中国語訳は、少年に気付かせて、会話まで加えている。そもそも原作のように滂沱の涙を流していたら、すぐにはきちんとしゃべられないだろう。中国語訳は、言外に泣き方まで小さくしているのである。不必要な改訳だと思う。

原作の誤りを、中国語訳が正している個所を挙げる。1枚のレコードを聴き続ける Lazarus に Sammy Rosinsky が別のレコードを買うよう勧める場面である。

One day Sammy Rosinsky, the privileged audience of Lazarus's afternoon concert, said: "They's other songs you can get by the store. Why don't you get something new? "

Sammy's answer was simple and effective. "I ain't got no money," said he. (31 頁右)

(ある日、Sammy Rosinsky が Lazarus の午後のコンサートに特別に招かれた客としていた、彼は「お店には他にも歌が売ってるよ。どうして新しいのを買わないんだい?」

Sammy の答は単純で説得力があった。「僕は全然お金を持っていないんだ。」と言った。)

邇時。盧信士則語拉薩留曰：“肆中唱片良多。子胡不購他種以自娛。”拉薩留曰：“其如我囊中羞澀何。”(3葉右)

(ある時、盧信士が拉薩留に「お店にはレコードがいっぱいあるよ。どうして他のを買って聴かないんだい?」拉薩留は「仕方ないさ、僕、お金が無いんだもの。」)

原作の「Sammy's answer」は、「Lazarus's answer」でなければ合わない。中国語訳は正しく拉薩留の台詞に直している。ただ、台詞も文言なので、どうも子供同士の会話には見えない。

#### 4 《滑稽小説 情歎苦歎》

原作は、『Tempus Fugit』で、Cosmopolitan 誌 Vol.46-No.4(1909年3月)に掲載された。

中国語訳は、『禮拜六』第25期((上海)中華圖書館,1914年11月21日 - 廣陵書社影印(2005年)を使用,刊行年月日は前掲『清末民初小説目録 第4版』に拠る)に掲載された。

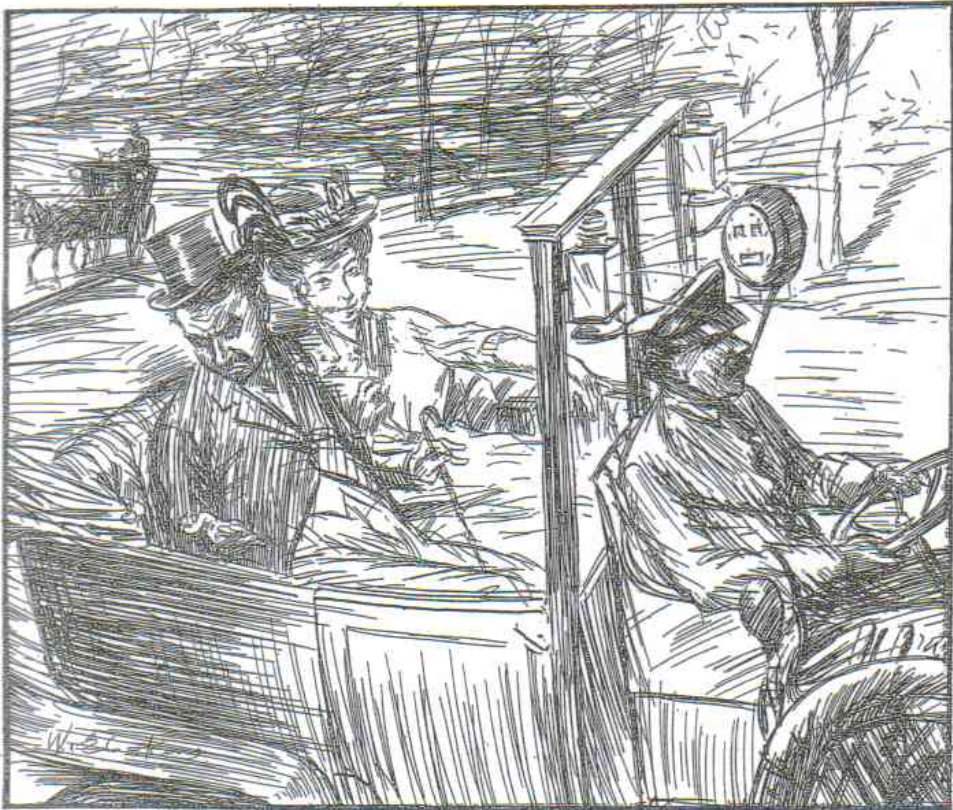
書名下に“英國白倫諾賴新著\*2”、“(警己)”とあり、原作者 Bruno Lessing をイギリス人に誤る。訳者“警己”は、未詳。

原作は、書名の下にラテン語の諺が引用される。作者が冒頭でその英訳を述べ、物語とは無関係で、ただ話の最初にラテン語の諺を置くことがよく見られるから引用したと言い、更に、その諺に強く興味を引かれたので引用元の編者に感謝したい等と述べる。

以上の前置き続く『Tempus Fugit』のあらすじを述べる。

Ezra Diefenbach は、ドイツ帝国の圧政を逃れ、出世するために、プロシアから Ghetto の町外れの Avenue A にやって来た。Café Bismarck の経営者の一人で、店には近隣のトランプゲーム好きの客がよく集まっていた。カフェを始めたのは、Otto von Semmel で、彼は旧友の Diefenbach を給仕として雇った。Semmel は貴族の出だったが、ここでは役に立たないので、昔の身分は捨ててしまっていた。彼は Diefenbach と共に苦労してきたので、自分が裕福になるチャンスだと思えば、友人も共に成功すべきだと考えていた。しかし、近所に同様のカフェが数多く開店したため、週末、Diefenbach に二人で決めた賃金15ドルを払うと、彼の手許にはその額以下しか残らないこともしばしばだった。トランプゲーム好きが客の大半だったが、皆、コーヒー一杯で5時間以上いた。午後、客がない時には、二人がお金を賭けてトランプゲームをしていた。賭けるお金がなくなると、週給15ドルの給仕の権利が賭けられ、それが二人の間でやりとりされ、週の利益を交互に分け合うようになっていた。

そこに、夫に先立たれた Wendel 夫人が現れ、すべてが変わった。家主の Cohen



HE GLANCED AT THE BILL. IT WAS ONE DOLLAR

が夫人を掃除係として雇ったのだが、Cohen から、夫人は高い身分の方で、やむを得ず今の仕事をしており、できるだけ夫人を援助してほしいと言われた。夫人は、若く美しく陽気で、相当な経験のある男でも、彼女の魅力に簡単にまいてしまうと思われるほどだった。Semmel と Diefenbach は初めて会った後、すぐに身なりをきちんとし、夫人に恋をしてしまった。カフェに二人でいる時もトランプゲームを止め、黙ったままお互いを恋敵として、こっそり相手の動きを観察していた。

ある日、Diefenbach にドイツから手紙と小切手が届き、遠戚から予期せぬ遺産を手に入れた。彼は銀行に預金し、夢だったシルクハットを購入した。彼は陽の光に輝くシルクハットをかぶり、もう一人の嫉妬を内心で笑いながら、カフェの前に長時間座っていた。Diefenbach はもの静かで、自分へのひやかしや拒絶に非常に敏感な男で、カフェで二人黙っていることもそれほど苦ではなかった。しかし、Semmel はおしゃべりでやかまし屋なので、その沈黙に苛立ちを感じていた。夫人は誰に対しても愛想良く、Diefenbach にはシルクハットがとてもお似合いだと言

い、1時間後には、Semmelに前より格好よくなっていると話した。

ある暑い日、Semmelは短気になっており、Diefenbachに、店先に座って夫人に色目を使うしかできないのか等と罵った。Diefenbachは驚き、あまり言い返せなかった。Semmelは罵倒より行動だと考え、夫人の家に行った。数分後、意気揚々と帰り、Diefenbachに、今夜、夫人と一緒に劇場に行く、自分は御婦人の扱い方を知っており、恋わずらいの顔をして一日中店の前に座ることはしない等と言った。Diefenbachは落胆した。Semmelはご機嫌で、夕方、身支度を始めた時、Diefenbachにシルクハットを貸してくれるよう頼んだ。Diefenbachは軽蔑して、パイプに火をつけ黙って天井を見た。Semmelは、嫉妬したければどうぞ、帽子を50かぶった君よりも、夫人は帽子をかぶっていない自分を選ぶだろう等と言った。

翌日の午後、店先に座っていたDiefenbachの前に夫人が来て、すばらしい劇だった等と話した。Diefenbachは一瞬ためらったが、思い切って、今晚一緒に散歩しませんかと誘った。夫人は即座に承知した。今度はDiefenbachがご機嫌で、身支度に数時間かけていた。Semmelは無関心を装っていたが、夕暮れにDiefenbachと夫人が腕を組み歩いて行くのを見ている時、彼はこの町中で一番不幸な人間のようだった。

二人はBroadwayを歩き、華やかさに夫人は喜んでいて。あるレストランから流れてきた音楽に、夫人は足を止め、すばらしい等と言ったので、Diefenbachは彼女を連れてその店に入り、今日の自分は浪費家です等と言った。二人が食事していると、ほこりに汚れた一団が入って来た。夫人はそれを見て、車で来たんでしょ、自分は車に乗ったことがないのでどんな感じかしら等と言った。彼は席をはずし、レジ係に車について尋ねた。係は車を借りるよりタクシーに乗ることを勧めた。彼はタクシーを知らなかったので更に尋ね、係はメーターや料金を教え、給仕頭にタクシーを呼ばせ、実物を見せた。彼は緑色のスマートな乗り物を注意深く点検し、係に車と同じだと確認すると、夫人をタクシーに乗せた。夫人は手を叩いて喜んだ。運転手にどこへと聞かれたので、彼が夫人の方を向くと、夫人は、どこでも、どんな感じが知りたいだけなの等と言った。運転手は理解したかのように出発した。タクシーは快適に走り、彼は夫人以上に楽しんでいて。しばらくしてメーターを見ると50セントだったので、なんて安価だ、毎晩夫人を誘ってタクシーに乗ろうか等と考えた。彼は、月明かりの晩に春の香りを感じながら、魅力的な女性とオープンカーに乗っていた。夫人は、今までになくこやかな笑顔で様々な事を陽気に話し

た。Diefenbach は、話題になっていないある悩みについて真剣に考えていた。そして突然、夫人に、結婚してくれますかと尋ねた。夫人は目を見開き唇を震わせた。やがて首を振り、家主の Cohen と婚約しました、Semmel から聞いてませんか等と答えた。彼は落胆したが、更に、Semmel は貴女に求婚したのかと尋ねた。夫人は笑って、秘密ですと答えたので、彼も笑って、していなければ秘密にする必要はないので、求婚したんだ等と言い、Semmel とは痛み分けかと思った。

II\*3

Diefenbach がメーターを見た所、3ドル90セントになっていた。彼は、戻るんだ、方向を変えろと叫んだ。運転手はすぐに引き返し始めた。夫人はじっと月を見ていた。こっそりポケットを探った所、3ドル75セントしかなかったので、彼はうなった。運転手がどこへと尋ね、彼が Avenue A と Houston Street と答えた所、夫人は微笑んで、家まですべて車で移動とは、なんて高貴なのでしょう等と言った。彼はうなるだけだった。メーターは更に上がっており、夫人に借りることは論外で、家以外にお金を調達できる所は無かった。Diefenbach が、何かする時はスマートにするのが好きなんですと言うと、夫人は、自分が好きなのはそんな男性ですと答えた。しかし彼の目も耳ももはや夫人には向いていなかった。メーターが上がるごとに彼は落胆した。走り始めはなかなか上がらなかったのに、今では、揺れたり角を曲がるごとに10セント上がっていくように思えた。黙っている彼に夫人が声をかけたが、彼はもう夫人のことなど考えず、メーターに集中していた。到着時には10ドルになるかも知れないと彼はため息をついた。店のレジで足りなければ、Semmel から借りなければならない、彼はぞっとしてメーターを見るのを止め、心の中でずっと自らを罵った。

着きました、運転手が言ったので、彼は目を開け、店の明かりを見、車を跳び下り、メーターの8ドル40セントを確認し、夫人が一人で下りられる様にした後、店に駆け込んだ。レジには2ドル55セントしかなかった。彼が、これで全部かと叫ぶと、店にいた Semmel が、そうだ、自分が盗んだとでも言うのかと言ってきた。彼は慌てて否定し、ちょっと待ってくれと言い、外へ出てメーターを見ると、8ドル50セントになっていた。彼が尋ねると、運転手は走行距離と時間で上がると答えた。彼は Semmel に、2ドル20セント貸して下さい、早くしないとまた上がる等と大声で頼んだ。Semmel は不思議そうに彼を見て、やがてニヤニヤと笑い、とてもゆっくりと、貸してくれなかったそのシルクハットの中に2ドル20セント入ってる

かも知れない、自分からは無理だ等と言った。そして前日にされた通り、葉巻に火をつけ、座ったまま天井を見た。Diefenbach は屈辱と悔しさで真っ赤になった。彼は、家主で、夫人の婚約者の Cohen に借りようと思いつき、外へ出た。運転手に2ブロック先だと話すと、乗るよう言われ、そのタクシーで行った。Cohen は不在で、今夜帰宅するかどうか不明だった。彼は落胆し、他の人を考えた。2,3年に一度訪ねている、いとこの Schmidt を思い出し、彼はタクシーに乗り60番街へ向かった。Schmidt は快く迎えたが、彼の負のオーラが伝染し、陰気な気分になった。Schmidt は同情して彼の話を聞き、家にお金は置いていない、明日、銀行が開けば用立てられる等と話した。Diefenbach は、明日なら自分でもできる、今必要だと言い、葉巻を勧める Schmidt から逃げるように外へ出た。Diefenbach は運転手に向かって、哀れっぽく、お金が無いので、明日、銀行が開く時に一緒に来てくれ等と言った。運転手が、全額払うまでそばにいと答え、更なる彼の質問に、メーターは上がり続ける、時間だけなら1時間1ドルだ等と答えた。彼はタクシーで店に戻り、堂々とした態度で運転手に待つよう言い、中に入った。メーターは11ドル20セントだった。Semmel が彼を見てあくびをし、自分はもう寝るが、君は楽しんだんだから、少しは働かないと等と言った。彼はうなづいた。今11時で、銀行が開くまで11時間あり、11ドルになる、合計22ドル20セントだ、そしてすべては周りに笑われるためである。彼は夫人を恨んだ。

タクシーのエンジン音が止み、店に静けさが訪れたが、彼の心はそれどころではなかった。2時間後、タクシーを見に行った。運転手は眠っており、メーターは13ドル20セントになっていた。次の2時間、彼は店のドアを開けてメーターの音を座って聞いた。眠れず、自分の愚かさを愚痴るだけだった。続いての数時間は何も起こらなかったが、彼の怒りは高まっていった。彼は、共同経営者、タクシー、運転手、そして特に夫人を恨んだ。夜が明けたが、彼は座ったまま、タクシーもそのままで、メーターだけが上がり続けた。彼は疲れ果てており、目を覚ました運転手も肩がこっているようだったが、メーターは肩こりも疲れも無かった。やがて町中がいつもの朝の喧騒に入り、近くの教会の鐘が9時を知らせた。彼は立ち上がり、タクシーに乗り銀行へ向かった。払い戻し窓口のカーテンに顔を押し付け、彼は1時間待った。10時にカーテンが開くと、彼は全額引き出した。1分後、運転手の所に戻ると、メーターは22ドル50セントだった。彼は急いで全額支払い、運転手に行くよう言った。運転手は、チップは無いのかと尋ねた。彼は啞然とし、チップかと

くり返ししながら顔を真っ赤にし、通りの敷石のかけらを拾った。彼は石を持ったまま、運転手に向かい、チップか、もう一度言ってみると叫んだ。運転手は彼の目を見ると、全速力で車を走らせた。そして角を曲がる時、バカ野郎等と叫んだ。Diefenbach は石を持ったまま動かず、チップとぶつぶつ言っていた。

おっさんのドタバタ失恋話である。故郷を捨て、海外移住するという強烈な体験を経ているので、この程度の体験ならば、立ち直るのは早いであろう。

中国語訳について述べる。主な固有名詞の対照表を示す。

原作	中国語訳	原作	中国語訳
Diefenbach	談芬培	Semmel	帥謀爾
Wendel	衛德	Cohen	康海
Bismarck	貝司馬克 or 貝司麥克	Broadway	百勞會街

書名について、原作は、ラテン語の諺で「Tempus Fugit」(光陰矢のごとし)とし、中国語訳は“情歎苦歎”(愛か苦か)とする。ラテン語の感じが出せないので、内容を考えて改めたのだろう。

内容の構成について、原作は二部に分かれ、422頁左から「II」になる。中国語訳は、書名を踏まえて、“一 小引”、“二 情”、“三 苦”の三部にする。

あらすじ紹介の前にも述べたが、原作は、書名下にもラテン語の諺を引用し、冒頭でそれについて述べる。本筋に無関係なので、中国語訳はすべて省略する。

本筋について、物語は変えないが、加筆・改訳・省略がしばしば見られる。中でも本作は省略が多いように思う。冒頭部分を挙げる。原作は、中国語訳に対応する部分から挙げる。

Ezra Diefenbach came from Rhenish Prussia to Avenue A which is on the outskirts of the Ghetto to escape the tyranny of the German monarchy and to make his fortune. In the former he succeeded. As to the latter well, Diefenbach was half owner of the Café Bismarck, an establishment on Avenue A that dispensed nothing stronger than coffee, never closed its door, and was the favorite resort of all the pinocle-players of the neighborhood. From the fact that Diefenbach was half owner of this property you might possibly deduce an opinion

as to his prosperity that would be erroneous, so I may as well tell you the truth.

It was Semmel's idea to start this café, and he took his old crony Diefenbach in as waiter. Semmel's full name was Otto von Semmel, and he was a full-fledged member of the German peerage. But Avenue A and Houston Street are full of peers of all nationalities, struggling to make both ends meet, and Semmel, finding his noble preposition a meager asset, abandoned it. He and Diefenbach had crossed the ocean together, had struggled and suffered together, and when Semmel thought he saw an opportunity to acquire affluence he insisted that his friend should prosper with him.

But, alas! cafés exactly like the Café Bismarck seemed to spring up around them overnight, like mushrooms, and it frequently happened that when, at the end of the week, Semmel paid Diefenbach the fifteen dollars wages they had agreed upon, he had considerably less than that amount left for himself. The pinochle-players who, to a casual observer, gave the place an air of great prosperity, came there regularly enough and made quite a lot of noise, but, as a rule, each player purchased one cup of coffee every five hours and nothing more. In the afternoons, when the place was deserted, Semmel and Diefenbach fell into the habit of playing pinochle themselves and played quite heavily, too, for their means. It happened, not infrequently, that Diefenbach's week's wages or his employer's week's profits were won or lost in advance. (418頁左-右)

(Ezra Diefenbach はライン地方のプロシアから Avenue A Ghetto の町外れにある にやって来た、それはドイツ帝国の圧政から逃れるためと富を築くためであった。前者について彼は成功した。後者について まあ、Diefenbach はカフェ Bismarck の所有権を半分持っていた、カフェは Avenue A の建物で、コーヒーより強いものは出さず、入口を閉めることは無く、近所のピノクル好きたちのお気に入りの場所になっていた。Diefenbach が所有権を半分持つという事実から、みなさんは彼が成功したと推測するかも知れない、それは誤りなので、私が真実を話した方がいいだろう。

このカフェを始めたのは Semmel の発案で、彼は昔からの仲間の Diefenbach を給仕として採用した。Semmel のフルネームは Otto von Semmel、彼はドイツ貴族としての資格を十分に備えていた。しかし、Avenue A と Houston



Street はあらゆる国の貴族であふれており、生計を立てるのに必死だった、Semmel は自らの高貴な経歴が貧弱な遺物であることに気付き、それを見捨てた。彼と Diefenbach は一緒に海を渡り、一緒に戦い苦しんだ、そこで Semmel は、自分が裕福になれる機会に出合えば、友人も共に成功すべきだと唱えていた。

しかし、ああ、カフェ Bismarck と同種のカフェが二人の周りに、一夜にしてマッシュルームのように続々と誕生したらしく、そのため、週末、Semmel が Diefenbach に、二人で取り決めた給料15ドルを渡すと、Semmel にはその金額より相当に少ない額しか残らないということがしばしば起こった。ピノクル好きは、その見物人も含めて、カフェに大賑わいをもたらすもので、とても規則的にやって来て大騒ぎするのだが、しかし、大抵の場合、客それぞれがコーヒー1杯で5時間過ごし、他は一切注文しないのである。午後、店が空いている時、Semmel と Diefenbach は二人でピノクルをする習慣に染まってしまい、しかも二人のやり方でとても熱心に遊んだ。Diefenbach の週給や雇い主の週の利益が、支払い前に、取った、取られたとなることがしばしば起こった。)

談芬培原是普魯士人。只因生計艱難。不容易謀事。便渡海到美國紐約。在哀凡牛街一爿貝司馬克咖啡館裏。充當一名跑堂。那館主人名字喚做帥謀爾。是一個德國破落貴族的子弟。也為祖遺的財產太少。不够他生活。也和談芬培一般。跑到紐約。打算尋點事兒做做。瞧着咖啡館資本不大。出息還好。就開了這貝司馬克咖啡館。但館中缺少一個跑堂。正在四處物色。恰巧談芬培來了。便僱了他。每禮拜工資美金十五元。他二人因是同國人。覺得分外投機。雖沒有管鮑分金那般的義俠。却也有福同享。有難同當。從來沒有分離過的。那咖啡館生涯倒也不惡。一到晚上。生意更好。館門往往徹夜不閉。只是鄰近咖啡館開得太多。出息上不免有些影響。每到一禮拜底。帥謀爾除去談芬培美金十五元的工資。自己所剩也就有限了。在旁人瞧着。每到晚上。館中人聲嘈雜。嘉賓滿座。總算生意興隆的了。誰知那班主顧。都是嗇鬼。三四個人合着喝一盃咖啡不算。還要坐着老不動身。至少坐個四五點鐘。好像一盃咖啡就買了這座兒去了。每日午後。館中生意還沒有上市。帥謀爾和談芬培閒着沒有事幹。便玩紙牌消遣。輸贏雖不大。兩人都提心吊胆。捏着一把汗。只怕輸了便不够一禮拜的澆裏了。看官。這都不是正文。要知怎的情。怎的苦。待在下喝口茶潤潤喉。再慢慢兒道來。(27-28頁)

( 談芬培はもともとプロシアの人で、生活が苦しく、仕事を探すのも容易ではなくなったので、海を渡ってアメリカ・ニューヨークにやって来た。哀凡牛街のカフェ貝司馬克で給仕を担当している。カフェの主人は帥謀爾、ドイツの没落貴族の子弟である。先祖の遺産が非常に少なく、生活するには十分でなかったため、談芬培と同様、ニューヨークへ逃げて来た。何か仕事を探していた所、カフェは元手がかからず、儲けもよさそうだったので、カフェ貝司馬克を始めた。ただカフェに給仕が一人足りず、ちょうどあちこち探していた時、折よく談芬培がやって来たので雇ったのである。毎週の賃金は15ドルだった。二人は同郷なので、大変気が合い、管鮑の交わりほどの義理堅さは無かったものの、幸福を授かれれば共に受け、困難に遭えば共に当たり、これまで離れ離れになったことは無かった。カフェの経営は悪くはなく、夜になると、更に商売はうまくいき、入口はいつも一晩中閉まらなかった。ただ、近所にカフェが非常に多く開店したため、利益面での影響は免れず、毎週末、談芬培への賃金15ドルを引いた後、帥謀爾に残るお金はわずかなものになった。よそから見ると、夜ごとカフェは賑わい、立派な客でいっぱいなので、商売は繁盛しているようだった。ところが、その常連客は皆ケチで、3,4人でコーヒー一杯しか飲まず、しかも腰を下ろしたまま全く動かず、最低でも4,5時間座っていた。まるでコーヒー一杯でその座席を買ったんだと言わんばかりだった。毎日午後、カフェがまだ空いている時、帥謀爾と談芬培はすることも無く暇なので、トランプゲームで時間をつぶした。賭ける額は大きくなかったが、二人ともびくびくして手に汗を握っていた。恐らく、負ければ一週間の生活費が足りなくなるからだろう。みなさん、ここまではすべて本筋ではありません。どう“情”(愛)するのか、どう“苦”(苦勞)するのかをお知りになりたければ、私がお茶でのどを潤し、再びゆっくり話し出すのをお待ち下さい。 )

中国語訳は、物語を大きく変えない程度に、自由に改訳・加筆・省略している。もう1例挙げておく。Diefenbach が夫人にプロポーズする場面である。

The widow had never before seemed to him so fair. Never before had she smiled upon him so sweetly nor chatted so gaily about everything in the world save the one matter that troubled his mind. Diefenbach thought it all out very carefully. He

reviewed his lonesome past, and he thought of his cheerless present and his hopeless future. Then he blurted out,

“ Anna, will you marry me? ” (421頁右)

(夫人は前にはそんなにきちんと彼のことを見たことはなかった。夫人は前にはそんなににこやかに彼に微笑みかけたことはなく、彼の心を苦しめる一つのことを除く、世界中のあらゆることについて、そんなに明るくしゃべったことはなかった。Diefenbach はとても注意深くそのことを熟考した。彼は寂しい過去を振り返り、陰気な現在と暗い将来を考えた。それから、彼は突然話しかけた、

「Anna、私と結婚してくれますか?」)

衛徳夫人更是有説有笑。那神情越發甜蜜可人。談芬培一一心領神會。牢記心坎。凡人到了極樂的時候。心中的話兒。便有些熬不住了。於是囁嚅道：“承夫人特別垂青。我斗膽有句話。要問問夫人。不知夫人肯嫁我麼。”(33頁)

(衛徳夫人は更にしゃべり笑い、表情はますます美しく好もしくなった。談芬培はその一つ一つを理解し、心の奥にしっかり留めた。人は楽しみが極まると、胸のうちをちょっと留めておけなくなるものである。そこで口ごもりながら言った「貴女の特別な御好意を承り、私は厚かましくも貴女にお尋ねしたいことがございます。どうか私と結婚していただけないでしょうか?」)

中国語訳はやはり自由に改訳している。中でもプロポーズに前口上を加筆している所が、さすがに礼節を重んじるお国柄だと興味深く思われる。

## 5 《滑稽小説 屬垣有耳》

原作は、『The Party Line A Tale of Telephonic Eavesdropping』で、Cosmopolitan 誌 Vol.48-No.1(1909年12月)に掲載された。

中国語訳は、『《禮拜六》第43期((上海)中華圖書館,1915年3月27日 - 廣陵書社影印(2005年)を使用,刊行年月日は前掲『清末民初小説目録 第4版』に拠る)に掲載された。

書名下に“原名 The Party Line 英國白倫諾賴新著”とあり、更に前書きにも“白氏爲英國滑稽小説家之泰斗”(白氏はイギリスのユーモア作家のトップである)とある(15頁)。前作《情歎苦歎》掲載から約四か月経ているのに、誤ったままである。また、本文



# The Party Line

A TALE OF TELEPHONIC EAVESDROPPING

By Bruno Lessing

Illustrated by C. E. Chambers



ALL the world loves a lover.  
Curiosity, thy name is wom-  
an. Eavesdroppers never hear

"Is that you, Sadie?"  
"Hello, David."  
"De ..."

冒頭も、

英國勃郎司維爾街。住著一戸人家。(16頁)

(イギリスの勃郎司維爾街に、一軒の家があった。)

とし、物語の舞台をイギリスにする。原作にも国名アメリカは現れないが、Lessing の他作品からみて、アメリカ・ニューヨークが舞台なのは明らかである。訳者の思い込みによるミスであろう。訳者は、《情歎苦歎》と同じ“警己”である。

原作『The Party Line』のあらすじを述べる。

「全世界が恋人に味方する」「好奇心、それは女性のことである」「盗み聞きで自分のいい噂は聞かれない」これらはすべて以下の Brownsville での物語に当てはまる。

Shifrin 家の夕食時、電話が鳴った。夫人は太っていたが、驚くほどの速さで受話器を取った。夫は、我が家への電話はベル2回で、今、4回鳴ったから、自分たちへではない等と言ったが、夫人は取り合わず、清らかな微笑を浮かべて聞き始め

た。

同時刻、同じ通りを3ブロック下った Rosenstein 家も夕食時で、電話が鳴り、夫人が慌てて受話器を取った。夫は少し驚き、我が家への電話はベル3回で、今のは4回だから、自分たちへではない等と言ったが、夫人は無視して電話を聞いていた。

その内容は、Sadie と David の恋人同士の会話で、最初は甘いいちゃつきで、続いて、二人の仲を自分の父は認めないだろうという Sadie の印象が語られた。その父が近づいてきたというので、Sadie が電話を切った。

3ブロック離れた所にいる Rosenstein 夫人と Shifrin 夫人は、共に満足し、受話器を置き、食卓に戻った。夫が尋ねると、Shifrin 夫人は、毎晩この時間に Davy Rosnofsky が Sadie Malbin に電話をかけ、甘いおしゃべりをすると言った。夫が眉をひそめて、それはいいことと言えますか、君が会話を他人に聞かれたらどう思いますか等と注意したが、夫人は、構わないと答え、Sadie の父が二人の交際を知ったら、ひどく怒るだろう、二人は結婚できるかしら等と付け加えた。

同じ会話が同時刻に Rosenstein 家でも行なわれた。両家の夫は、この件について不同意を述べ、自分は関与しないと述べるだけで、それ以上夫人に強く言えなかった。

翌晩も電話が4回鳴り、両夫人は急いで受話器を取った。内容は、Sadie の父がお金のために彼女の嫌っている男との結婚を彼女に求めたというもので、David は彼女に今から広場で会おうと提案し、彼女も承諾した。早速、両夫人は夫を、音楽を聴きに広場まで行こう等と誘った。両夫は理由もわからず引っ張られ、混雑している広場に行ったが、両夫人は音楽が少ししか聞こえない広場の端に進んだ。両夫人はお互いの存在は気に留めず立ったまま、若いカップルがお互いに夢中になっている様子を満足して見ていた。

両夫はこの件にほとんど関心が無かったが、両夫人に次第に感化され、1週間後には詳細まで知るようになっていた。例えば、ある晩の Shifrin 家では、電話が終わり、夫人が、Davy が Sadie にダイヤの指輪を渡したことを話すと、夫は、二人は喧嘩して絶交状態だったんだらうとコメントした。また、Rosenstein 家では、夫人が、昨夜は Davy が Sadie を劇場に連れて行ったと話すと、夫は、仕事があるから行けないと言っていたのでは等とコメントした。

ある晩、ベルが4回鳴り、両夫人は会話を聞いた。その内容は、Davy が Sadie に駆け落ちを迫るもので、日曜の夜10時に彼女の家のそばで待つので、必要なもの

だけ持って、来てくれというものだった。両夫人ともひどく驚き、すぐに両夫に伝えた。両夫は、盗み聞きはよくない等と言うだけだった。

数日後、Shifrin と Rosenstein は喫茶店で偶然出会い、チェスを始めた。その間、様々な話題が出たが、電話の恋愛の件は全く出なかった。Sadie の父、Malbin が来店し、チェスを見物するため、二人のテーブルに座った。Shifrin は負けていたので、盤面に集中し、Malbin の問いに何を答えたか覚えていなかった。Malbin は突然テーブルをたたき、うそだ！と叫んだ。Shifrin は驚き、ようやく、お嬢さんの Sadie は Davy Rosnofsky に夢中だと思う、と言ったことを思い出した。Rosenstein は Shifrin から助けを求められたと思い、Malbin に、皆が二人の恋仲を知っている、男は彼女にダイヤの指輪を贈りませんでしたか、等と言った。Shifrin は、二人は広場で会っていませんでしたか、と尋ね、更に Rosenstein が、日曜の夜に駆け落ちが計画されていませんか、と言った。Malbin は怒りで一言も無くそのまま店を去った。Shifrin が、何も考えずふと言葉が漏れた等と言うと、Rosenstein は、お互いの電話が共同線だと気づき、君の妻も聞いているのか等と言った。Shifrin はうなずいた。二人は、このことは妻には言わないということで一致した。

日曜の夜、Shifrin 夫人は遅い散歩に出かけ、Malbin 家の前で偶然 Rosenstein 夫人に出会った。二人はおしゃべりしながら、時々 Malbin 家の窓を見たが、最大の関心事は一言も出なかった。やがて馬車が現れ、David Rosnofsky が Malbin 家の窓の下に立ち、見上げた。両夫人は黙ってその様子を見つめた。David が軽く口笛を吹くと、窓が開き、大量の水が落ち、更に桶が落され、David の頭を直撃した。Malbin(父)が勝ち誇った顔で窓から身をのり出し、ごろつきめ、今度見つけたら警察を呼ぶぞ、と怒鳴った。両夫人はそれを見て悲鳴を上げた。そしてお互いに黙ったまま分かれて急いで帰宅した。David が傷の手当てのため、帰宅した時、Sadie からの伝言に気付いた。それは彼が出かけた数分後に届けられていた。そこには、今夜は来てはいけない、父は Rosenstein と Shifrin から話を聞いてすべて知っている等と書かれていた。David はカフェに行き、チェスをしている Shifrin と Rosenstein を見つけた。彼は冷静な低い声で、すべて話してもらおう、と言った。二人は本能的に彼の手をつかんで、弁解し、妻が電話を盗み聞きしていたことを話した。David は怒りながらもある計画を思いつき、脅迫めいた言葉を交えつつ、二人に約束させた。その約束は、明晩10時に野外音楽堂そばの広場で自分を待つこと、このことを絶対に誰にも言わないこと、だった。二人にはその意図は全くわか

らなかった。

翌晩、いつもの時間に電話が4回鳴り、両夫人はすぐに聞き耳を立てた。内容は、David から Sadie に、伝言が間に合わなかったことで自分を責めないように言い、今晚外出できるか尋ねた。Sadie が、父がいるので無理だと答えると、David は、1時間後にかかけ直すと言った。そして話題を変え、昨晚、広場で Shifrin と Rosenstein が劇団の女優二人と一緒にいるのを見た等と言い、彼らの妻のことを考えると、彼らを強く責められない、彼らは今夜10時にまた同じ場所で会おうと誘っていた等と付け加えた。両夫人は大変な感情の変化があったが、婉曲に責めようと考えた。Shifrin 夫人は夫に、昨晚どこへ行っていたかまだ聞いていない、と言うと、夫は新聞から顔を上げず、いつものカフェだと答えた。夫人が、今夜もそこへ出かけるの、と尋ねると、夫は夫人を見て、今夜は約束があるが、誰にも話せないで何も聞かないでほしい、と答えた。夫人は部屋を出て小声で泣いた。同じ頃、Rosenstein 夫人も小声で泣いていた。

10時に Rosenstein と Shifrin は野外音楽堂のそばのベンチに座っていた。自分たちはどうなるのだろうと話していた所、暗闇から二人の女性が現れ、「年寄りの恥知らず、カフェにいるんじゃないの、女優と待ち合わせかい」等と叫んだ。両夫人はヒステリックになり、両夫は驚いて顔を見合わせ、説明できる状態になるのを待っていた。そこに伝言配達少年が現れ、両夫に David からの手紙を渡した。それには、「二人が女優と会っているのを見たと思ったが、自分の誤解だった、二人が浮気していると思ったことをお詫びする、だがこのことは電話で Miss Malbin に話ただけだから、誰も知らないだろう、知っているとすれば、偶然に電話を聞いた卑しい人くらいで、それ以外なら、そいつは更に品性下劣な奴だろう」等と書かれていた。両夫人は気持ちを挫かれ、両夫の肩にもたれて泣くしかなかった。両夫は機械的に両夫人を慰めた。そこに、Malbin が慌てた様子で現れた。彼は「用件は何だ、命に関わる用件だからすぐに会いたいと電話で言われた」等と言った。両夫は「何も無い、電話をかけてもいない」等と答えた。Malbin はピンときて、家に駆け戻った。ドアの所にメモが貼ってあった。それには、「親愛なるお義父様へ」と書き出し、「こんなことをして申し訳ないが、貴方に家を空けてもらうために仕方なかった、今頃、Sadie と私は結婚して、ナイアガラの滝に向かっています、お許しの電報をお待ちします」等とあり、追伸として、「二人からキスを送りませう」等と書いてあった。

盗聴した内容を他人に話したり、それによって行動したりすることはいけないという戒めである。当時の電話については知らないのだが、上記のような設備ならば、ある家が電話を使っている間は、電話線を共有している他の家は電話を使えないことになる。また、相手以外の人を受話器を取ったら、聞こえにくくなるのではなかろうか。音声を変換した電流が電話線内を走っているのだから、その線を共有している他人が受話器のスイッチを入れたら、電流が枝分かれして、その分、本来の相手に到達する電流が弱くなる、つまり音声が小さくなるのではないかと思う。

中国語訳について述べる。主な固有名詞の対照表を示す。

原作	中国語訳	原作	中国語訳
Shifrin	希弗令	Rosenstein	陸成興
David Rosnofsky	大尉 洛司諾甫	Sadie	珊黛
Malbin	梅爾屏	Brownsville	勃郎司維爾

David は Dave や Davy と書かれるが、訳語はすべて大尉である。

書名について、原作が、副題込みで「The Party Line A Tale of Telephonic Eavesdropping」(電話共同加入線 電話の盗み聞きの話)とするのを、中国語訳は“屬垣有耳”(壁に耳あり)とする。恐らく、直訳では簡潔にできず、内容を踏まえた成語にしたのだろう。

内容については、本作でも物語を変えずに、改訳・加筆・省略が見られる。まず、原作冒頭の3つの俗諺を中国語訳はすべて省略し、前掲したように“英國…”から始める。また、原作の最後で、David から Malbin へのメモの末尾に、

PS. Sadie sends a kiss. Me too. (42頁右)

(追伸：Sadie からキスを送ります。そして私からも。)

とあり、気の利いた終わり方になっている。中国語訳は省略する。挨拶のキスの習慣が無いからであろうが、冒頭の省略と併せて、非常に残念である。

次に、宗教関連の言葉があるために改訳した例を挙げる。最初に両夫人の盗み聞きを示した後の場面である。



The same conversation took place at the same time in the household of the Rosensteins. Both husbands, being learned in the Talmud, expressed their disapprobation and paid no further attention to the matter, for all Talmudists know that he who undertakes to regulate the foibles and weaknesses of a woman embarks upon a perilous sea. And neither Rosenstein nor Shifrin was a good sailor. (38頁左)

(同じ会話が同じ時間に、Rosenstein 家でも行なわれた。双方の夫はタルムードの中で学んでおり、反対を述べ、その件についてそれ以上の注意を払わなかった、というのは、すべてのタルムード信奉者が、女性のうぬぼれや弱点を統御する義務を負うことは危険な海に出航するようなものであることを、知っているからである。そして、Rosenstein もShifrin も勇敢な船乗りではなかったのである。)

那陸家夫婦也講了一番。且不去提他。却說希弗令和陸成興本來很覺投機。常常在咖啡館飲酒著棋。聽電話的明天。二人又在一家叫做泰墨的咖啡館裏會面。話中引話。彼此提起昨夜竊聽的事來。二人都不贊成那種行爲。要想加以壓束。但管妻子也不容易。手段稍劣。不免弄出笑話。貽笑外人。所以相約採用放任主義。不去干涉。(18頁)

(一方の陸家でも夫婦間で話が交わされたことは置いておく。さて、希弗令と陸成興はもともととても仲がよく、しょっちゅうカフェで酒を飲みチェスを指していた。電話を聞いた翌日も、二人は泰墨という名のカフェで会い、会話中、お互いに昨夜の盗み聞きのことを話題にした。二人ともそういった行為には反対で、止めるよう圧力を加えたいと思ったが、妻を管理するのも困難で、やり方がまずければ、笑い話になって他人に笑われてしまうとも考えた。そこで、放任主義を採り、干渉しないということで一致した。)

原作は、この一週間以上後の駈け落ちの直前に、二人がたまたまカフェで会い、チェスを始め、そこに Malbin も見物に来る、そしてチェスに夢中になるあまり、Shifrin がポロッと漏らしてしまうまで、電話の内容は話していないことになっている。駈け落ち直前の偶然の重なりが面白味を増す要素になっていると思うのだが、中国語訳のように改めれば、それが減じるだろう。更に、Talmud(タルムード,ユダヤ

教の聖典の一)になじまない中国の読者のために、改訳するのは仕方がないと思うのだが、カフェの名前にするのはやはり訳しすぎだと思う。店名は覚えやすいかも知れないが、客はあまり入らないだろう。

もう1例、改訳を挙げておく。最後の方で、David の手紙が届き、その文面が明かされた直後の場面である。

Mrs.Rosenstein and Mrs.Shifrin were weeping bitterly upon their husbands' shoulders. Their spirits were crushed; there was nothing to say, nothing to think, nothing to do but weep. Their husbands attempted, mechanically, to soothe them, but I doubt if they went about it with any great enthusiasm, for Rosenstein says that every time he looked at Shifrin he found Shifrin winking at him. (42頁左)

(Rosenstein 夫人と Shifrin 夫人はそれぞれの夫の肩にすがりひどく泣いた。両夫人の気持ちは挫かれていた、話すことも、考えることも、することも無く、ただ泣くしかなかった。双方の夫は機械的に慰めようとした、ただ彼らがどれほど気持ちを込めていたかは疑わしい、なぜなら、Shifrin の方を見るたびに、Shifrin が自分に向かってウインクしていたと Rosenstein が述べているからである。)

那兩位密昔司心知弄錯了。險些兒把丈夫打死。一時覺得不好意思。只得捧着臉。倚在丈夫的肩上。嚶嚶啜泣。希陸二人平白無故捱了一頓打。還不能抱怨老婆一句。反要用溫言軟語去安慰他們。叫他們別哭。兩位密昔司見他們丈夫走來勸慰。越發撒嬌撒痴哭個不了。(27頁)

(両夫人は間違いに気付いた。あやうく夫をたたき殺してしまう所で、すぐに申し訳なさを感じ、ただ顔を上げ夫の肩に寄りかかり、ひどく泣いた。双方の夫は無実のまま一しきりたたかれたが、それでも妻を叱るわけでもなく、逆に温かくやさしい言葉で妻を慰め、泣かないよう言った。両夫人は夫が慰めてくれたので、ますますひどく、駄々をこねるように泣き続けた。)

原作からは、両夫人が泣いたのは、David の手紙の中で、当てこすられ、大変な侮辱を受けたためだと読める。しかし、中国語訳では、誤って夫をひどくたたいた申し訳なさからのように見える。やはり不必要な改訳に思える。また、原作には両

夫人がヒステリーを起こしたとあるが、夫をたたいたとは書いていない。一方、中国語訳は、ひどい殴打を加えたようにしており、訳しすぎである。

## 6 《滑稽小説 饕餮名家》

原作は、『The Meanest Man That Ever Lived』で、Cosmopolitan 誌 Vol.44-No.6(1908年5月 - Nabu Public Domain Reprint(影印,刊行年月日不記)を使用)に掲載された。

中国語訳は、『小説大観』第14集(上海文明書局,1919年9月1日 - 上海書店/江蘇広陵古籍刻印社影印(1990年6月)を使用,刊行年月日は前掲『清末民初小説目録 第4版』に拠る)に掲載された。

書名次行に“美國伯倫奴梨星著”、“毅漢”とある。《薔薇花》、《留聲機》と異なり、訳者は張毅漢一人である。ただ、張毅漢の翻訳なのに、原作者 Bruno の訳が、前作の“伯倫那”から“伯倫奴”に変わっている。訳語は統一した方がいいと思う。

原作『The Meanest Man That Ever Lived』のあらすじを述べる。

Cohen は洋服の仕立てをしている老人で、Hester Street の市場で洋服を屋台に並べ売っていた。彼は孫の Davy のために、bar mitzvah(ユダヤ教の13歳男子の成人式)の祝宴を催し、来客が大勢いた。Cohen は上席に座り、卑しい人間の話をした；その男は全く見知らぬ男で、ズボンを買うと言い、Cohen が品物を包んでいる時、彼の腕時計を盗み取った。男は20ドル札を渡し、彼が両替で離れた際に、屋台ごと持ち逃げした。しかもお札は偽物だった。聞き終わると、Davy は、その男は世界一卑しい男かと尋ねた。Cohen がそうだと答えると、Davy は更に、世界のこれまでにいた人の中で一番卑しい男かと尋ねた。Cohen は旧友でもある来客たちの顔を見たが、彼らは皆、目を合わせないようにし、その話題を嫌がっているようだった。Cohen は Davy に「いや、より卑しい男がいた、だがもうお前の寝る時間だ」等と言った。こうして私は次のような話を聞くことができた。

Rosenheim 老人がどうやって裕福になったのか、Ghetto 内では誰も知らなかった。彼は銀行預金を持ち、小規模の印刷業を営み、かなり儲かっていると噂されていた。彼は賢くて、とても感じがよかったが、同時に、Ghetto で稼いだ人の中で一番欲深い男だとあちこちの喫茶店で語られていた。人々は彼から情報を引き出したいと思ったが、彼の持つ欲深さとある種の威厳のために何も聞けなかった。

# THE MEANEST MAN THAT EVER LIVED BY BRUNO LESSING

Illustrated  
by  




彼は毎晩、仲間と一緒に飲食・トランプ・おしゃべりをしていたが、1セントも払ったことがなかった。家具の無い部屋に住み、朝食は自炊、昼食は最も安価な果物で済ませたが、夕食にお金がかかることに苦痛を感じていた。彼はよく「お金は世界で一番得がたいものだ、手に入れるために労働や頭脳を犠牲にしている、なのに、僅かなお金を得るだけで十分幸運に感じる世のパカどもは、なぜあんなに簡単にそれを手放すのだろう」等と使用人の Brandes に話していた。

ある夏の休日、彼は店の前に座り、ずっと考え事をしたり、含み笑いをしたり、安上がりな方法でその日を過ごしていた。突然、彼は大声で笑い出し、通行人がおかしくなったのかと目を向けるほどだった。日没後、彼は弁護士の Cohen を訪ねた。彼は遺言の代筆はいくらかと尋ね、15ドルと聞くと、少し書いてもらうだけだから5ドル以上は払えないと言った。弁護士は彼のことを知っているの、その条件で作成した。内容は、家と印刷屋は某君に残す、その他の財産はすべて某君に残す、というものだった。弁護士は、遺言執行者が必要であること、署名は立会人の前で行なわねばならないことを説明した。彼が遺言執行者について尋ねたので、

弁護士はその役割と、事前に無償で行なうことを決めていなければ遺産の一定の割合を支払うと法で定められていることを説明した。彼は納得し、遺言の見本を持ち帰った。その夜、彼は遺言の組版を作り、相続人の名前の部分は空けたまま1枚複製を印刷した。組版は金庫に入れ、気分よく就寝した。

翌晩、彼は喫茶店に肉屋の Rosnofsky と毛皮商の Fishlovitz を呼び出した。Fishlovitz には、1度夕食をおごってもらったと言い、Rosnofsky には、2度ユダヤ教の料理法にのっとったソーセージを贈ってくれたと言い、自分がお返しをする番だと言って、遺言書を示し、Fishlovitz には家を、Rosnofsky にはそれ以外を残そうと言った。そして、自分は体調不良で、医者からワインの飲み過ぎは良くないと言われている、自分が死んだら二人は遺産を受け取れる等と話した。二人は呆然としていたが、内容がわかると、「天使のような人だ、親愛なる友よ」等と言い、彼にワインをごちそうした。彼は遺言に二人の名があるのを見せた。遺言執行人が決められ、書き入れられ、遺言は Rosnofsky の金庫に預けられた。Fishlovitz は二人を招待し、祝宴を挙げることにした。その家へ向かう途中、Rosenheim は「他の友人に知れたら気分を害するだろう、そうなる遺言を書き換える必要が出てくるので、これは三人の秘密だ」と言い、二人とも秘密にすると誓った。

翌日から Rosenheim は、遺産受取人の二人の家で代わる代わる夕食をごちそうになり、太って陽気になった。彼は快活で物知りで話も面白かったので、特に家族内の女性に気に入られた。二人は彼のために食材を競うように買っていた。

ある日、Rosnofsky が風邪をひき医者に行くと、しっかり自己管理するよう言われ、更に Rosenheim を見習うよう等と言われた。彼が Rosenheim は健康なのかと尋ねると、医者は、百歳まで生きる等と答えた。その日の午後、Rosnofsky は熟考し、晩に Fishlovitz を家に呼んだ。そして Fishlovitz に、「自分たちはいつまで Rosenheim のやり口に耐えるのだろうか」と言い、遺言作成の日から自分たちが Rosenheim を養っていることや医者に言われたこと等を話した。Fishlovitz もしばらく考えて、「君の言う通りだ」等と言った。

夕食時、Rosenheim が Fishlovitz の家に来た時、彼は祖父の命日で断食していると言い、夕食を断った。Rosenheim は落胆したが、すぐに明るさを取り戻し、「Rosnofsky の家に行く」と言い、更に「明日は誕生日だ」と言った。彼が「おめでとう、百歳以上長生きできるように」等と言うと、Rosenheim は首を振って「食べ過ぎで全く調子が良くない、医者にこれ以上食べるとすぐに死ぬと言われ

た」等と話した。Rosenheim が Rosnofsky の家に行くと、彼は足湯につかっていた。Rosenheim が、「夕食後に何か読み聞かせてあげよう」と言うと、彼は「夕食はとらない、ミルクだけと医者に言われた、すぐに寝る」等と話した。Rosenheim はため息をつき、「明日は誕生日だ」と伝えた。彼が「長生きするように」等と言うと、Rosenheim は「無理だ、ワインの飲み過ぎで、医者からこれ以上飲むと自殺するようなものだと言われた」等と話した。

Rosenheim は金庫から遺言の組版を取り出し、複製を6枚印刷すると、クスクス笑いながら、自腹の夕食を食べに出かけた。

翌日、洋服の仕立てをし、Hester Street の市場で12台の屋台を所有していた Cohen はいつもの豪華な昼食をとろうとしていた。その時、Rosenheim が訪ねて来た。Cohen が「すぐに食事を終えるから」と言うと、彼は豪華な料理を一目見た上で、「自分の遺言の遺産受取人の所を見せたい、自分は長生きしないと思う」等と言った。Cohen は見ると、「家を除くすべてを私に?」等と叫んだ。彼は「以前、10セントのすばらしい葉巻をくれた、その親切が忘れられなかった、ただ誰にもこのことを話さないでほしい」等と言った。Cohen は「絶対に話さない」と言い、彼を昼食に招いた。Rosnofsky と Fishlovitz の所で時間を無駄にしたと彼が後悔するほど豪華な食事だった。遺言には、家を Gordon に残すとあったので、Cohen が尋ねると、「ワイン売りの Gordon で、以前、1pint(約0.47リットル - 筆者)のワインを買おうとしたら、同じ値段で1quart(約0.95リットル - 筆者)のを売ってくれた、忘れられない親切だった」と彼は答えた。Cohen は「守銭奴め」と思ったが、口では彼を褒め称え、「ワインを用意しておくから」と言って、彼を夕食にも招いた。Cohen 夫人は目をキラキラさせ、愛想よく微笑んでいた。彼が帰った後、夫人の最初の言葉は「彼は長生きするかしら?」だった。Cohen は「自分より年上だが、自分たちより長生きするかも知れない、美食家だが、たくさん食べると体調が悪くなると話していたし、医者にワインは毒だと言われたと話していた」等と言った。

Cohen は、ますます健康になっていく Rosenheim を見てあきらめるまで、6か月近くごちそうを続けた。Gordon は1年近く続けた後、ワインを贈るだけにした。次は、食料雑貨商の Abrahams と不動産仲介の Markstein が遺産相続人になった。二人も長い間、ごちそうを続けた。二人の後にはまた別の二人、というように5年近く続いた。皆、秘密にすることを誓わされ、皆、ごちそうしたり贈り物をしたりして

彼に感謝した。そして、皆、死にかかっているはずの彼のことを結局はあきらめたのであった。

しかし、誰にも死はやって来る、Rosenheim もある夜、眠っている間に安らかに Abraham の御許に召されたのである。ユダヤ教会は葬儀参列者でいっぱいだった。ほぼ全員が3時に Rosenheim の印刷所に来るようにとの弁護士からの手紙を持っており、熱くなり、そわそわし、その目は乾いていた。3時1秒過ぎ、小さな印刷所には人が詰め込まれていた。彼の法律顧問という John Stewart が現れ、自己紹介後、彼の死の3日前に受け取った遺言書を示した。更に彼が遺言書をしばしば送ってきたことを話した。そして、遺言を読み上げることになり、場は静まりかえった。内容は、家と印刷業は使用人 David Brandes に残し、その他の財産はすべて Jewish Charitable Society(ユダヤ慈善協会)に残すというものだった。遺言読了後、沈黙が続いたが、Rosnofsky がため息をついて立ち上がると、数秒で誰もいなくなった。

翌日、Rosnofsky と Fishlovitz はこの件について話し合った。二人は最も長く待たされ、他の遺産相続人には全く気付かなかった。二人は故人を非難し、故人のすべてを非常にひどく呪った。Rosh Hashana(ユダヤの新年祭)が来て、Rosnofsky の心は乱れていた。彼は1年近く故人に憎悪を抱いていた。そして今、Yom Kippur(贖いの日)が近づいていた。恨みが心にある限り、誰も自らの罪を贖えない。彼は司祭に告白した。司祭は、贖いの日の前日に故人の墓を訪ねて、許しを請うよう話した。彼は元気を得て帰った。指示された日、彼が墓に向かう途中、Fishlovitz に出会った。行き先を尋ねられたので、彼は「許しを請いに故人の墓へ行く」等と答えた。二人は同道した。墓地に入ると、Gordon に出会った。彼は会釈し、何も言わず去った。次に Cohen(洋服の仕立て業)に出会った。彼は二人に歯を見せて笑った。故人の墓には大勢集まっており、皆、遺言を聞かされた人たちだった。皆、何も言わず、目を合わせなかった。突然、偉大な天啓が Rosnofsky に響いた。「Rosenheim は頭のいい男だったな」と言い、二人は顔を見合わせて笑った。

遺言をエサに、知り合いの夜の食卓を渡り歩いた Rosenheim で、お金を節約しただけでなく、家族一緒の会食という温かさも味わえて、満ち足りた晩年であつたらう。彼にごちそうを続けた人たちも、心のどこかに(或は大部分に)早く遺産が欲しい(=早く亡くなってほしい)という気持ちがあつたので、彼の良心は痛まなかつた

であろう。

中国語訳について述べる。主な固有名詞の対照表を示す。

原作	中国語訳	原作	中国語訳
Cohen(洋服業)	可痕	Rosenheim	羅慎赫姆
Cohen(弁護士)	可因	Rosnofsky	勞納士凱
Davy	達衛	Fishlovitz	費司洛斐
David Brandes	大衛 勃蘭 or 勃萊德士	East Broadway	東 百老匯

同じ綴りの Cohen が、別人だという理由であろうが、可痕になったり、可因になったりしている。訳語を変えなくても、別人だということは読めばわかるので、同名には同じ訳語を使うべきだと思う。更に、同じ Cohen が、《情歎苦歎》では康海となっている。訳者が変わると、こうも違うのかと思ってしまう。加えて、Rosnofsky も、《屬垣有耳》では洛司諾甫となり、Broadway も、《情歎苦歎》では百勞會(街)になる。また、Brandes が、前半では勃萊德士となるのに、最後では勃蘭とする。訳語は統一してほしいと思う。

書名について、原作「The Meanest Man That Ever Lived」(史上最も卑しかった男)を、中国語訳は“饕餮名家”(食欲の達人)とする。この訳はすっきりしていて、本質をついており、原題の感じを損ねていないと思う。

内容については、改訳・加筆・省略が多く見られ、物語の結末を変えてしまっている。まず、冒頭で孫から質問された Cohen が客の顔を見回す場面を挙げる。

And so on, slowly, until his gaze had roamed over the faces of some dozen of his old cronies, all of whom seemed to show a sudden aversion to the topic that was being discussed. He then turned to his grandson and, with a faint smile, “No, Davy,” said he. “Dere vas vunce a meaner man. But it iss time for you to be in bed.”

Which is how I came to learn the story. (567頁右-568頁左)

(とるように、ゆっくりと、彼が数十人の旧友の顔をじっと見ていくにつれ、全員が、検討中の話題への突然の嫌悪感を示しているようだった。それから彼は孫の方を向き、少し微笑んで「いや、Davy」彼は言った。「かつてもっと卑しい男がいたんだよ。だが、お前はもう寝る時間だ。」



そういうわけで私はこの物語を知ることになった。) )

可痕依次遍視諸客。如議院中之議長。一一遍問諸議員。有無意見提出。已而。皆已通過。衆均無異議。議長始微笑謂其孫曰：“否也。自古迄今。尚有鄙惡於此君者一人。但爾宜歸。勿更持倦強聽。”達衛去。可痕乃爲吾等言之。實則達衛尚躡足於板縫竊聽也。其言如後。(1頁)

(可痕は順番に客たちを見回した。それは、議会で議長が、議員一人一人に提出する意見があるかどうか尋ねて回るかのようだった。そして、全員を回り、皆から異議は出なかった。議長はようやく微笑み、孫に言った「いや、昔から今に至るまでには、まだその男よりも卑しい者が一人いたんだよ。だが、お前はもう戻りなさい。これ以上疲れたまま無理して聞くことはない。」達衛は出て行った。可痕は我々のために語った。実は、達衛はこっそりやって来て、壁板の隙間から密かに聞いていたのだ。その物語は以下の通りであった。)

省略あり、加筆ありで、あまり忠実に訳していないことがわかる。特に、孫がこっそり聞いていたと加える個所は、後の展開の伏線になっているわけでもなく、加筆の理由が全くわからない。原作は強い訛りがそのまま活字化されているが、拙訳にはその感じは出せなかった。

中国語訳は結末を大きく改め、原作573頁右43行から最後(574頁)までを省略する。遺言発表の場面を挙げる。

“ My name, gentlemen, is John Stewart. I was for many years the late Mr.Rosenheim's legal adviser, at least in so far as his financial affairs were concerned. He sent me his will, which I have here, only three days before his death. From time to time he sent me the names of his friends whom he wanted to be present when his will was read, which accounts for the request you received to be here to-day. As a matter of fact ” Mr.Stewart's twinkling eyes peered over the edge of his glasses and slowly took in the whole room “ as a matter of fact, Mr.Rosenheim had a curious habit of sending me a will every two, three, or four months, always asking that the last one be destroyed. The wills, however, were all alike. They read exactly like the one I have here, which I shall now read. ”

The stillness in the room was deathly.

“ The house in Rivington Street and my printing-business I leave to David Brandes, with my blessing. Tell him not to spend his money foolishly. All the rest of my property I leave to the Jewish Charitable Society to use as they think best. The president of the society, Mr. John Stewart, and David Brandes are to be the executors, without pay. ”

For the space of nearly a minute the stillness continued. No one moved. The lawyer's audience sat, as if spellbound, gazing into vacancy, thinking, thinking. Then Rosnofsky heaved a long sigh and arose. That broke the spell, and in a few seconds the room was deserted. The men went off in as many different directions as they could find, silent, uncommunicative. They had no clear idea as to where they were going. Each wanted to be alone. Each wanted to think. (573頁右)

(「みなさん、私の名は John Stewart です。私は長年、故 Rosenheim 氏の法律顧問でした、少なくとも彼の財産に関する限りです。彼は私に遺言を送って来ました、ここに持っています、それは亡くなる僅か3日前でした。時々、彼は私に友人の名前を送って来ました、遺言が読み上げられる時に同席してほしいと思っている友人たちです。そういうわけで、みなさんが受け取られたお願いには、今日ここにお出で下さるようにとあったのです。実際」 Stewart 氏の輝く目が眼鏡の端を通して、ゆっくりと部屋全体をにらむように見渡した

「実際、Rosenheim 氏には、2,3か4か月ごとに私に遺言を送って来るという奇癖がありました、それにはいつも前の遺言は破棄するようにとあったのです。しかし、遺言は皆、同じようなものでした。私がここに持っているものとそっくりのことが書いてありました、それでは読み上げます。」

部屋の沈黙は死んだようなそれだった。

「Rivington Street の家と印刷業を、私は祝福と共に、David Brandes に残す。彼にはお金を浪費しないように伝えてほしい。私の財産の残りすべてを、ユダヤ慈善協会に残す、協会が一番いいと思う方法で使ってほしい。協会代表、John Stewart 氏と David Brandes が、無報酬で、遺言執行人となる。」

1分近くの間、沈黙が続いた。誰も動かなかった。弁護士の聴衆は、まるで呪縛されたかのように、空を見つめ、考えて、考えながら座っていた。そして、Rosnofsky が長いため息を吐いて立ち上がった。それで呪縛は解かれ、2,3秒で

部屋は空っぽになった。人々は黙って、誰とも話さずに、それぞれが全くばらばらの方向へと去って行った。彼らは、どこに向かうのか何も考えていないようだった。各人が一人になりたがっていた。各人が思いをめぐらせたがっていた。) )

“ 諸公。吾名約翰土地華。羅慎赫姆法律上之律師也。數日前渠以其遺囑寄予。渠自七年前。至今日寄其遺囑與吾者。四次矣。彼每次寄來之遺囑。輒言上次所立者取銷。今此爲最後者。亦有效者也。其遺囑曰：‘ 勞納士凱。費司洛斐。可痕。高頓。阿伯拉哈姆。馬克士丁。凡此諸人。吾皆曾受其數飯之恩者也。各人遺以美金一元。並令彼等勿浪用此金。其來處至不易也。餘者捐入猶太人之慈善會中。至於作何用途。任之可也。前此所立之遺囑。皆作爲廢。一概無效。以慈善會長約翰土地華及大衛勃蘭爲管理人。無酬勞費。’ ” 約翰讀已。笑曰：“ 羅慎赫姆先生。誠善人也。吾等宜於其靈前行禮以誌哀敬。” 言至此。衆人一闕而散。皆毒詈羅慎赫姆不已。其詈之最烈者。勞納士凱與費司洛斐也。(7-8頁)

(「みなさん、私の名は約翰・土地華で、羅慎赫姆氏の顧問弁護士です。数日前、彼は遺言を私に送って来ました。彼は、7年前から今日までに、4回遺言を送って来ていました。彼は遺言を寄こす度に、前に作成したものは取り消し、今度のものが最後で有効なものだと言って来ました。その遺言には次のようにあります：『勞納士凱、費司洛斐、可痕、高頓、阿伯拉哈姆、馬克士丁の各人は、私がたびたびごちそうになった恩人である。各人には1ドルを残す。併せて、このお金は稼ぐのがとても大変だったので、浪費しないよう彼らに伝えてほしい。残りはユダヤ人の慈善会に寄付する。どのように使うかはお任せする。以前に作成した遺言は皆、廃棄することとし、すべて無効である。慈善会長の約翰・土地華と大衛・勃蘭が、無報酬で管理人となる。』」約翰は読み終わると、笑って「羅慎赫姆氏は本当に善人です。私たちは彼の靈前に礼を捧げ、哀悼と尊敬の意を表しましょう。」ここまで話した所で、集まった人たちはわいわい言いながら散って行った。皆が激しく羅慎赫姆を罵り続けていた、中でも最も激しかったのが、勞納士凱と費司洛斐だった。)

原作はあらすじで紹介した通り、この翌日、Rosnofsky と Fishlovitz とが会って、故人を激しく恨むのだが、後悔した Rosnofsky が許しを請うため、司祭の勧めに従

って、故人の墓へ行く。その途中、Fishlovitz に会い同道する、また、やはり許しを請うたと思しき Gordon や Cohen に会い、更に墓前には同様の人が集まっています、二人とも故人への恨みを捨て去るのである。一方、中国語訳は上記で終わっている。訳者が宗教色を出すのを憚ったのであろうか、原作を損なったひどい改訳である。ただ、同じ改めるならば極端にした方が、とも思う。例えば；Rosnofsky をガラス屋に改める Rosenheim の計略に気付いた後も彼にごちそうを続ける 但し、食事の中には微細に砕いたガラス片を混ぜておく 1か月後、蓄積したガラス片が血管や消化管の壁を破り、体内のあちこちで出血する Rosenheim はケチを貫き、医者と呼ばぬまま、苦しんで亡くなる Rosnofsky は遺産を相続しながら、体内をボロボロにしたガラス片でも、故人の分厚いツラの皮だけは破れなかった等と回想する。これで極端になっていると思うのだが、翻訳能力だけでなく、性格までちょっぴり疑われるかも知れない。

7

Bruno Lessing は多作ではあったが、短篇集としてまとめられることが少なかったため(私家版を含め4冊)、現在ではあまり有名ではないようである。管見の及ぶ限りでは、日本語訳は、『夢想家』(ブルーノ・レッシング,妹尾アキ夫訳,原作不明,『新青年』第18巻第16号(博文館,1937年11月5日)掲載)一作のみである。その彼が同時代に中国に上陸し、五作も翻訳されていたことを明らかにした\*4。五作とも原作は短篇集に収められていないようなので、翻訳はすべて雑誌から直接行なわれたのであろう。海外の雑誌を読み、気に入った作品を見つけ、それを翻訳し、ほどなく自国の雑誌に掲載する、という雑誌の時代が1910年代の中国にすでに到来していた、本稿もその証左となる。 罫

【注】

- 1) “梨”字は、原文は“黎”となっている。《留聲機》では“梨”とするので、誤りであろう。また、前掲『清末民初小説目録 第4版』では、「((美)伯倫那梨星著)」のように全体に( )がついている(Q0414\*)。明記されているので、( )は不要であろう。
- 2) 前掲『清末民初小説目録 第4版』は「(英)白倫諾頼著」と「新」を抜かず(Q1014\*)。恐らく、原文を「白倫諾頼の新著」と見なしたのであろう。正しくは「白倫諾(=Bruno)・頼新(=Lessing)の著」である。
- 3) 冒頭に「I」の表記は無い。

4) 余談であるが、原作にたどり着いた過程を記す。まず、禮拜六43を読んだ時、《屬垣有耳》に“原名 The Party Line...”とあった。英文書名をインターネットで調べると、同名作品が複数あったが、白倫諾頼新から、Bruno Lessing と推定し、掲載誌 Cosmopolitan を見てみようと考えた。その前に、“警己”と“白倫諾...”の他作品を『清末民初小説目録 第4版』で調べると、《情歎苦歎》もあり、それも先に読んでおいた。それから Cosmopolitan を閲覧し、【屬垣有耳 = The Party Line】を確認した。更にメモをしながら閲覧を続け、『Tempus...』に行き着き、【情歎苦歎 = Tempus Fugit】を確認した。その後、小説大観14を読んだ時、《饕餮名家》がどこかで読んだ記憶に引っかかった。メモを見ると、『The Meanest...』と一致したので、伯倫奴梨星 = Bruno Lessing と推定した。それをもとに『清末民初小説目録 第4版』から《留聲機》《薔薇花》を見つけ、読むとメモの『The Troubles...』『Bête...』と一致した。改めて、Cosmopolitan を閲覧し、【饕餮名家 = The Meanest Man That Ever Lived】【留聲機 = The Troubles of Lazarus Abrahamovitch】【薔薇花 = Bête Noir】を確認した。以上である。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社, 1993年5月

郭浩帆「張毅漢 - 一位被遺忘の小説家」 - 『清末小説』第26号, 清末小説研究会, 2003年12月1日

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》中華書局, 1997年2月

大澤肇, 今井航, 小川唯, 小野寺史郎, 戸部健「『中華教育界』記事目録」 - 『近代中国研究彙報』第32号, 財団法人東洋文庫, 2010年3月18日

William J. Burling「Bruno Lessing ( Rudolph Block )」 - Daniel Walden 編『Twentieth-Century American-Jewish Fiction Writers』(Dictionary of Literary Biography Volume28) Gale Research Company, 1984年

William G. Contento 管理 HP「The FictionMags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2012年7月8日確認)

Randy Jackson 管理 HP「Roots of the Grateful Dead」内の「The True Story of Casey Jones」

<http://taco.com/roots/caseyjones.html> (2012年7月8日確認)

(内に「From “ Erie Railroad Magazine ” Vol 24 (April 1928), No 2, pp. 13, 44.」)

N・M卿管理 HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search (アガ・サーチ)」

<http://www.aga-search.com/> (2012年7月8日確認)

(わたなべ ひろし)